

市三函館博物館

研 究 紀 要

第 9 号



1999

市立函館博物館

研 究 紀 要

第 9 号

1999

序

ここに「市立函館博物館研究紀要」第9号を発行いたします。

昨年度松本泰和氏より寄贈を受けました昆虫標本の蔵品目録を刊行したところですが、この目録の作成にあたりましては、松本氏と長年、研究交流を深めてこられた関係諸氏による整理作業などご尽力を賜ったところであります。松本コレクションと銘打たれたこの資料は国内外の昆虫標本350種余に及んでおり、今後とも研究分野はもとより多方面に活用されるものと思われま

さて本号では、目録作成の協力者のお一人であります猪子龍夫氏に「渡島半島のチョウー松本コレクションに因んでー」と題する玉稿を頂戴いたしました。松本コレクションはチョウ類を中心としたものでありますが、それに相応しく本稿では渡島半島におけるチョウ類相の特徴について叙述されています。さらには昨年の夏に新聞報道されて多くの人々の関心を呼びましたウラナミアカシジミなどのチョウに関する最新の状況や飛来するチョウの確認等、非常に興味深い内容となっています。同時にチョウの生息を通して環境を考えるとということの問題提起をも含んでいます。ご寄稿いただきました猪子氏にこの場をお借りして厚く御礼を申し上げます。

次に当館の尾崎渉学芸員による「大沼電鉄の足跡ーその1 観光地大沼と大沼電鉄着工までー」を掲載しました。函館市民にもなじみ深い隣町の大沼は国定公園として北海道を象徴するものの一つですが、本稿はその大沼を舞台に函館の経済界も係わりをもった大沼電鉄の歩みを明らかにしようとするものであります。従来の研究において必ずしも大沼電鉄の動向は知られていませんが、昭和初期から戦後にかけて20年余にわたり営業され、大沼を起点として東隣の噴火湾沿いに面した鹿部町を結ぶ軽便鉄道として地域に少なからぬ影響を及ぼしました。本稿では交通基盤（鉄道）の整備と地域開発といった視座にあわせ、鉄道開通以前の交通事情や大沼が観光地として評価されていく過程なども詳述しています。紙面の関係で本号および次号と2回に分けて掲載します。

当館は道南地域における中核の文化施設としての使命を担っていますが、そうした課題に対して今後とも幅広い研究・調査を継続させてまいりますので、関係各位におかれましては種々のご指導を賜りますようお願いいたします。

平成11年3月31日

市立函館博物館長
菅原 繁昭

目次

序

渡島半島のチョウ

—松本コレクションに因んで—

猪子 龍夫 1

松本コレクション 北海道採集一覧 18

大沼電鉄の足跡

—その1 観光地大沼と大沼電鉄の着工まで—

尾崎 渉 25

はじめに	25
1. 北海道鉄道の開通	25
2. 観光地大沼	27
3. 大正期の交通と私設鉄道敷設計画	29
4. 渡島軌道問題と渡島海岸鉄道の開通	31
5. 大沼電鉄の着工	34

渡島半島のチョウ

—松本コレクションに因んで—

猪子 龍夫

1 はじめに

昨年、市立函館博物館に収蔵された松本泰和氏採集のチョウ（蝶）類を中心とした標本の整理、目録作成を担当させていただいた。標本の産地は新潟県を中心とした隣接各県がおもになっているが、種類によっては北海道から沖縄までの全国にも及んでいて、種類数、個体数とも充実したコレクションとすることができる。整理作業にあたっては、どの種類もすでに図鑑や写真で十分に見知っているものばかりであるにもかかわらず、道南のチョウを見慣れている目には本州産は少し違って見えたりしたものである。本州産は大きいとか、どこかの色彩部分が広いとか、いくらかの違いを感じたり種類によっては別種みたいに見えたりもして非常に興味深いものを感じたものであった。あらためて標本（実物）の持つ価値の大きさを認識させられた。

これを機にあらためて道南のチョウに視点をおいて特徴的な種類や最近の話題のチョウについてまとめてみた。

2 渡島半島の特徴

北海道の南西端に位置している渡島半島は、以北の地と地続きであるにもかかわらず、分布しているチョウ類相は「北海道らしくない」のであるが、それについては猪子（1991）、小松（1997）に述べられている。

要約すると①本州から北海道のほぼ全域に広く分布する種類の割合が最も高い。その上で、②北海道らしさの主役となる、日本では北海道のみ生息する種類が渡島半島では非常に少ない。反対に③分布の中心が本州にある種類が、津軽海峡を越えて渡島半島から北海道南西部まで達している種類の割合がかなり高いなどである。従って、渡島半島は本州北部の影響をより多く受けていて「北海道らしくない」要因となっている。

南北に細長く、北は亜寒帯から南は亜熱帯まで広がっている日本列島では、日本のどの地域でみても概ね北からの寒冷地に適応している種類の南下と、南の温暖地に適応している種類の北上が交錯して、各地域の特色あるチョウ類相を形成しているようにみえる。

渡島半島でも例外ではなく、北方系種と南方系種が交錯してチョウ類相を形成しているが、他の地域にはない地理的特徴として、一つは南側を津軽海峡で区切られていること、さらに渡島半島部は日本列島の中でも最も東西幅の狭い地域の一つであることを上げることができる。これらの特徴は渡島半島の「北海道らしくない」チョウ類相になんらかの影響をもたらしている要因の一つとして考えられるが、現状では力足らずで十分な検討は不可能である。過去の海進、海退による津軽海峡の一時的な陸橋化とその後の海峡成立、さらに石狩低地帯や黒松内低地帯の持つ地史的な意味やともなって気候の変動、植物相の遷

移など総合した詳細な検討が必要と考えられる。

3 最近の注目されるチョウ

(1) ウラナミアカシジミ

翅（はね）を開いたときの大きさが3.5cmほどの、表面は橙色で周辺に黒色の縁取りがあり近縁のアカシジミと似ている。裏面は橙色の地に細かく断続した黒色縦線が10本ほどあり、そのコントラストは目をひく美しいチョウである。南の青森県では広く分布していて、北海道でも主として石狩低地帯を中心とした低山帯に分布しているが、いずれも局所的であることが知られている。

しかし長い間どうしたわけか両産地のあいだをつなぐ渡島半島からは採集されず分布記録の空白になっていた。同様に本州では東北地方まで分布し、北海道でも道南地方より北

には分布しているが渡島半島には記録がないという分布パターンを示すチョウが他にもヒメギフチョウ、チャマダラセセリ、オオムラサキ、ウラジャノメ等何種かが知られてる。これらの種類はウラナミアカシジミをふくめて、過去に何らかの生息の制約を受けて空白がおこり、そのまま現在に至ったのではないかと、とか日本列島への侵入の経路が違うためかななどと、いつも道南のチョウ仲間の話題の一つとなっていた。

1998年8月函館市東山町でウラナミアカシジミが採集された、と北海道新聞、函館新聞に写真入りで報道され、地元の同好者を驚かせた。採集者の田川眞熙氏のご好意で採集現場を案内していただいたが、なんとそこは意外なことに市営東山墓園の真中なので再び驚いてしまった。採集された個体は、羽化したばかりの新鮮な♀であった。

田川氏の話によると、墓園を造成するとき

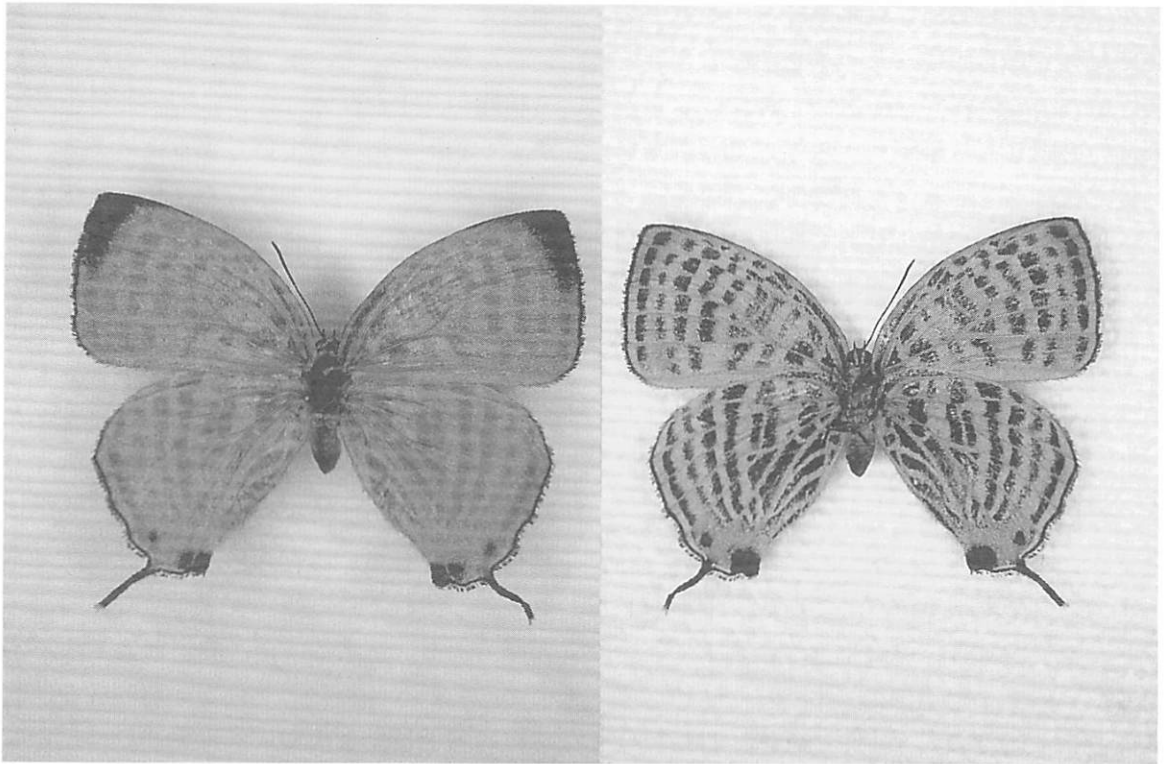


写真1 ウラナミアカシジミ 函館市東山産 左表面 右裏面 対馬誠氏撮影

に原生林の一部が緑地帯として残されたもので、造成以前は人の手がほとんど入っていない、分け入ることも難しいほど鬱蒼たる雑木林であったそうである。緑地帯に残された樹種の中には、ウラナミアカシジミが最も好むコナラが、他の地域では見られないほどに大木化して12本ほど現存している。また墓園の周縁にも、かなり人の手が加わり範囲は狭いがミズナラ、コナラ、クリ等を中心とした雑木林が残されていて、このあたり一帯はウラナミアカシジミを含めた平地性雑木林のチョウの棲息環境として、条件がそろっていると見受けられた。

地形の上では亀田半島の蝦夷松山山塊と函館市街地の平野部との間に形成された2段の海岸段丘の段丘崖にあたっていて、段丘面と段丘面を結ぶ急斜面に相当している。そのためか古くから開拓されてきたこの地域であるにもかかわらず人手をまぬがれて、部分的に原植生に近い状態で遺存されていた可能性が高いと考えられる。墓園造成の時にも幸いウラナミアカシジミが生息していたコナラが残されていたものと思われる。

発見以来、田川氏の案内をふくめて二度ほど探索を試みたがアカシジミ、ムモンアカシジミ、ジョウザンミドリシジミなどを採集するにとどまり、残念ながらウラナミアカシジミの追加記録をすることはできなかった。今後墓園をはじめ周辺の雑木林など、類似の環境での詳しい調査が進められ、ウラナミアカシジミの分布状態が明らかにされていくことが期待される。

ともあれ今まで確認できないままに、なかばきめつけて「ウラナミアカシジミは道南には生息していないだろう」と言ってきたことが覆され、渡島半島のチョウの種類数がまた1種類追加されて、更に詳細なチョウ相が明

かされていくことは喜ばしいことである。

今回のウラナミアカシジミの発見は、これ以外の渡島半島で分布記録の空白になっているチョウにも期待をもたらした出来事とすることができる。春の女神ヒメギフチョウや国蝶オオムラサキほかの未確認種についてもあるいはと、ひそかな期待を持って探索していく必要の重要性を痛感させられたものである。と同時にこれらのチョウの生息環境である平地に近い雑木林をこれ以上消滅させないでほしいと願うところである。

(2) キタアカシジミ

ウラナミアカシジミに近縁で大きさや色彩も似ているアカシジミは、ミズナラ林にごく普通に生息しているシジミチョウの一種であるが、その幼虫はミズナラを食べて成長すると同時にカシワでも育つことが知られていた。

10年ほど前頃からカシワ食幼虫はミズナラ食のアカシジミ幼虫と少し違っていることが北海道で観察され、急にチョウ仲間注目されはじめた。その後、成虫の斑紋や交尾器にも一定の差があり、カシワ林のみに生息するなどが次第にわかってきて、とうとう新種として認められ和名をキタアカシジミと命名されたのである。実は、だいぶ以前に別種として記載はされていたのであったが、その後の扱いでは注目されないまま経過していたもので、三十数年ぶりに復活したことになったのである。

渡島半島でもキタアカシジミの生息を確かめるためカシワ林を求めて調査を始めたが、なかなかまとまった条件の良いカシワ林には行きあたらなかった。渡島半島でのカシワ林は駒ヶ岳を取り巻くものが最も規模が大きく、恵山の山麓、函館山山頂でやまとまったものと、あとは半島を取り巻く海岸段丘面に小

規模に残されている程度である。

詳細な調査はまだ十分ではないが、渡島半島のキタアカシジミは今までの知る範囲では駒ヶ岳山麓の森町尾白内から砂原町押出あたりまで生息を確認することができている。函館市石倉、戸井町、檜山管内上ノ国町、江差町、乙部町の海岸段丘面にもまとまったカシワ林はあるが今のところ生息は確認されていない。どうやらカシワ林ならどこでも生息しているわけではないようである。

晩秋に発生しカシワ林でのみ採集されるミ

キタアカシジミの生息と重なっているわけで、両種に共通する何らかの生息条件があるかも知れないと考えると更に興味深いものがある。

(3) オオモンシロチョウ

今まで日本では採集されることがなかったオオモンシロチョウが1996年夏、北海道で採れたというニュースが広まってきた。このチョウはもともとヨーロッパ、北アフリカからヒマラヤにかけて生息していたチョウである。ファーブルの昆虫記にも登場し幼虫はキャベ

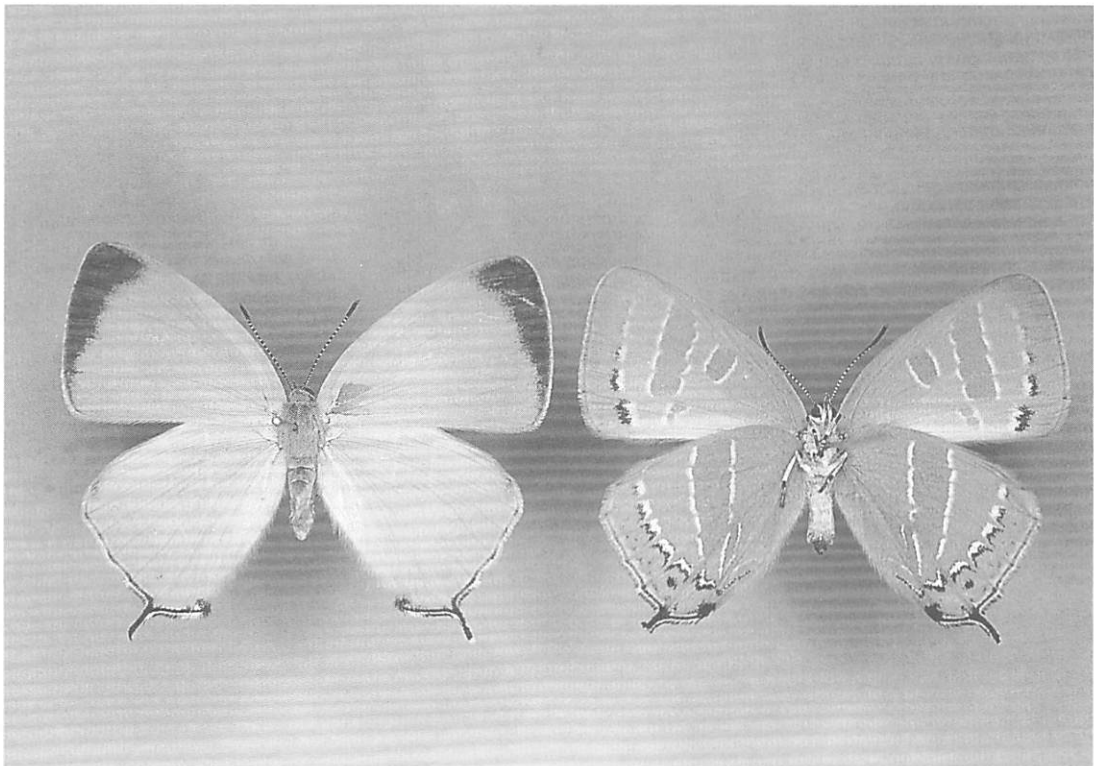


写真2 キタアカシジミ 森町尾白内産 左表面 右裏面

スジキリガは、ガ（蛾）の中では美しい種類ということが出来る。このガは個体数も少なく、燈火には集まらないので採集されにくい。そのため糖蜜でおびき寄せて採集する方法が使われるが、このガもどこのカシワ林にでもいるわけではなく、渡島半島では今のところ森町尾白内のみで採集されている（未発表）。

ツなどを食べる有名な大害虫である。数年前から大陸側では東方への分布拡大が言われていたが、とうとうユーラシア大陸の最東端の島国まで到達したことになる。

日本への侵入は当初、輸入物資に着いてきたとか、風に乗って飛来したとか、人為で持ち込まれたとかさまざまな推測がされていた



写真3 オオモンシロチョウ 森町鳥崎産

が、本来移動性が強く長距離の飛行力を持つことや、採集されている地域が日本海側に集中しているなどを考えると、沿海州方面から日本海を越えてきた自力飛來說が有力ではないかと思っている。

日本で初めて採集されたのは1996年6月後志の共和町で、その後同年7月札幌市定山溪、後志仁木町などでも確認され（本間1998）、このニュースはたちまち道内のチョウ仲間伝わっていったのである。

これが伝えられてからは道南のチョウ仲間も互いに情報交換をしながら休日ごとの調査に飛び廻った。実物を見たことがないため当初、オオモンシロチョウはモンシロチョウよりどれほど大きいのか？、飛び方などの生態的特徴は？、どんな場所に多いか？まったく手探り状態で、戸惑うばかりであった。

そのうちに渡島半島でも徐々に採集記録が集積されて分布が明らかになり、その年のう

ちに渡島、檜山の海岸線を中心にほぼ全域にまで広がっていたことがわかったのである。とくに乙部町や森町では、家庭菜園のキャベツ、ダイコン、ブロッコリーほかのアブラナ科野菜で、卵や幼虫が発見されて大量の個体を飼育することにも成功したのであった。一度見てわかってしまえば当たり前になってしまうが、モンシロチョウよりは確かに大きくて、飛び方もダイナミックで少し気をつけて観察すれば捕まえる前でもオオモンシロチョウとわかってしまうほどであった。

全道的にもこの年の10月までの間に調査が一気に進み、その結果として北海道南西部ではほぼ全域で、また北にはなれて離島を含む宗谷支庁管内でも確認されたのである。同時に本州でも青森県で津軽、下北の両半島部から確認され、発見1年目のこの年だけでも分布の広がり是非常に大きいものであることが次第にわかってきたのである。

もしこのような猛烈な分布拡大が2年目以降も続くとすれば、比較的短い期間に北海道全域に、また本州でも東北地方での南下拡大がおこることはあきらかと思われた。しかし本間氏(1998)によってまとめられた、発見から3年目の生息分布図を見る限りでは確実に広まってはいるものの、1年目の拡大のすさまじい勢いは見られないように思われる。青森県側でも総体的な情報は得ていないが、あまり広まってははいないように聞いている。

まったくの推測で今となっては確かめようもないことであるが、本間氏(1998)が指摘のように最初の北海道への侵入は1996年以前であったと考えるのが妥当ではないかと考えられる。発見初年の1996年北海道南西部ほぼ全域で一気に分布が確認されたが、おそらくその時点では既に侵入後ある程度浸透していたものと考えられるが、その後の分布拡大の様子が納得できるような気がする。また、飛来到達の地点は1か所と考えるよりは多数箇所であった可能性の方が高いと思っている。

函館付近でもすっかり定着し、個体数も多くどこにでも普通にいるチョウになったようである。生態的にも家庭菜園や林縁のアブラナ科植物を巧みに利用しているようで今後ますます繁栄していくと予想している。しかし、1979年に今回のオオモンシロチョウと同じように大陸側から北海道に侵入し3年間にわたって生息していたチョウセンシロチョウがその後姿を消してしまった経緯があるので、今しばらく推移の観察を続ける必要があると思っている。同時に生態的にも似ているモンシロチョウなどの在来近縁種との盛衰の経緯についても観察していく必要があると思っている。

ヨーロッパでは大害虫とされているが、今のところ北海道では甚大な被害などと騒がれていないのは意外なことである。

(4) コヒョウモン

このチョウは北海道と本州に分布するが、本州での分布は狭く中部山地帯、関東北部に限って分布している。本州の個体群は北海道の個体群に比べて後翅裏面の色調などの差によって別亜種とされている。北海道の亜種はほぼ北海道全域に分布しているが、本州北部の青森県では分布していない。したがって渡島半島は北海道亜種の南限にあたっている。渡島半島部では南下するにしたがって衰えていく傾向が顕著であり、北海道亜種は北から分布を拡大してきたもののように推測することができる。両亜種の成立は日本列島への侵入経路や年代の違いで長期間地理的に隔離された結果ではないかと考えられる。

渡島半島では北部の長万部町、北檜山町、今金町などでは比較的広く分布しているが八雲町ではやや局所的となり、それ以南では非常に少なくなっている。最南の記録は上磯町梅漬峠付近(永盛 1988)とされている。いずれの産地も沢地に入り込んだ場所で、非常によく似た近似種のヒョウモンチョウが平地や平地と山地の接点のような場所に多いのとは対称的になっている。

1995年6月に大野町中山峠でこのチョウの幼虫の食草であるオニシモツケ葉上で4頭のコヒョウモン幼虫を見つけ飼育し、7月に無事羽化させたことがある。この産地はすでに記録もあり最南の梅漬峠よりは北であるが、渡島半島南部での確実な飼育記録となる。

北海道亜種が北から分布を拡大してきたと考えるとき「北海道らしさ」を代表するチョウの1種として数少ない渡島半島まで南下しているチョウということができる。函館市をふくめた亀田半島側や木古内町より西の松前半島側では今のところヒョウモンチョウしか

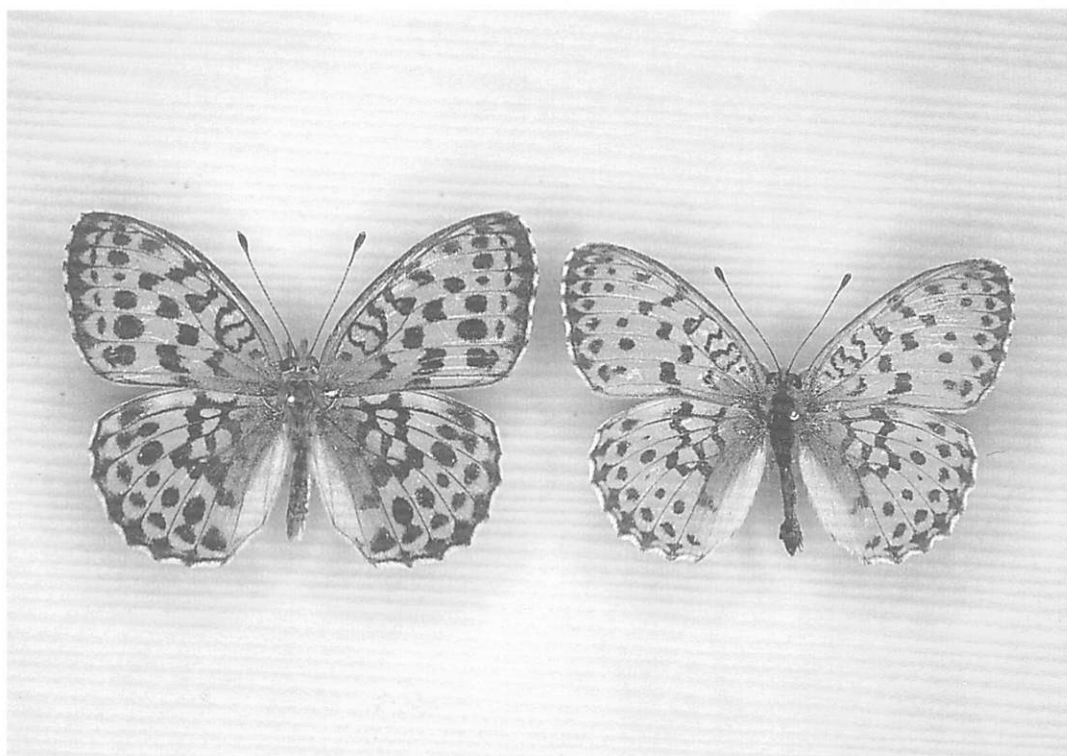


写真4 コヒョウモンとヒョウモンチョウ

左コヒョウモン 大野町中山峠産 右ヒョウモンチョウ 函館市赤川産

記録されていないが、沢地の奥を重点に詳細な調査をし、渡島半島南部でのコヒョウモンの分布状態を解明していくことが望まれるところである。

渡島半島南部での衰退がコヒョウモンよりも更に顕著な、日本では北海道のみに分布するチョウとして他にヒメウスバシロチョウがある。今のところ八雲町、大成町あたりまで記録されているが以南の確実な産地は知られていない。はたしてどのあたりまで南下しているか、興味のないところである。

4 渡ってくるチョウ

北海道では土着していないが、道南部には毎年のように本州から飛来し、繁殖しながら一時的な分布を広げているチョウがいる。アサギマダラ、ウラナミシジミ、ヒメアカタテ

ハ、イチモンジセセリなどで、夏から秋に向けて個体数を増して行くが、いずれの種も北海道での越冬は不可能とされている。

この4種のほかに南から渡ってくるチョウとしてアオスジアゲハ、クロアゲハ、キチョウ、メスアカムラサキ、ツマグロヒョウモン、ウスイロコノマチョウが記録されているが、いずれも一時的に出現した迷チョウ、偶産チョウと考えられている。

(1) ヒメアカタテハ

ヒメアカタテハは春に他の越冬タテハ類よりはやや遅れて出現するが、おおよそ北海道全域で毎年普通に採集されるチョウであったため、かつては北海道でも越冬しているチョウと考えられていた。その後の観察で降霜程度の寒さでも死滅することが判明し、関東地方以北での越冬はできないことが確認された



写真5 ヒメアカタテハ 函館市亀田大森産

ため、現在では厳冬の北海道では当然越冬できないとされている。道南では5月から採集されているが、私の標本箱に上ノ国で採集した6月の標本がある。渡島半島各地で採集した7月～9月の標本よりやや大きくかなり汚損しているところを見ると、どうやらこの個体は本州から飛来した個体そのものと思われる。7月に砂原町の海岸でシロヨモギを食べている幼虫を見つけ飼育した結果、8月に羽化させることができた。一般にこの頃より個体数が増加し、秋にはコスモスの花などで吸蜜する姿を普通に見ることができる。霜降と同時に死滅する。古くからヨーロッパでも毎年北アフリカから地中海を飛び越して飛来することで有名である。

(2) ウラナミシジミ

ウラナミシジミも寒さには弱く温暖な無霜地域でなければ越冬はできないチョウである。

ヒメアカタテハのように毎年北海道まで飛来することはないようだが、この小さいチョウも時折津軽海峡を飛び越しやってくるチョウである。渡島半島南部各地で1955年の9月から11月にかけて採集されたのが、北海道から初めての記録となっている。当時ウラナミシジミの渡りを研究していた東京の磐瀬太郎氏は、このチョウの飛来を確認する方法として好物のフジマメを植えることを推奨していた。東北地方でもめったに記録されないチョウなので半信半疑であったが、函館でも春山昌夫氏など数人の同好者が、同氏より送っていただいたフジマメの種を栽培してみた。それが見事に的中し、花穂に産卵していることまで確認されたのであった。当然1955年以前にも飛来していたことは間違いないのであろうが、その当時は採集者が非常に少なかったこともあって気づかなかったものと思われる。それ以来本州での発生が順調な年にはしばしば北



写真6 ウラナシミンジミ 1955年9月 函館市五稜郭町 (北海道で初めて撮影された写真。花穂に卵が見える)

海道まで飛来し記録されている。最近の数年間には気候の推移が順調でないことが原因なのか、あるいは本州での発生数が少ないためか飛来の確認は非常に少なくなっている。対馬誠氏が榎法華村で採集した1996年の1♀が最も最近の記録になっている。

(3) アサギマダラ

大型の美麗種でゆったりと優美に飛び廻り目に付きやすいためか、古くから少ないながら函館付近では記録されているチョウである。本州でも関東地方以西の温暖地でなければ越冬できないチョウであるが、北海道には5月頃から飛来し発生を繰り返しながら北上し分布を広げている。北は利尻島まで記録はあるが、渡島半島での記録が圧倒的に多い。本州では遠距離の渡りを調べるため、毎年各地で

採集してはマーキング後放蝶し、再捕獲する調査が実施されている。道南ではほぼ毎年のように、採集または目撃されているが、個体数が少ないためマーキングして放蝶するまでには至っていない。8月末から9月初旬にかけてが最も個体数が多くなる時期なので、道南の適当な多産地でマーキングして放蝶する調査をぜひ実施してみたいものである。北海道でこの時期放蝶されたものがどこで再捕獲されるか、非常に興味深いところである。北アメリカでは同じマダラチョウ科のオオカバマダラが秋季メキシコ国境付近まで南下するように、北海道で発生したアサギマダラも本州へ南下することが確められれば画期的な発見ということができる。

(4) イチモンジセセリ



写真7 アサギマダラ 函館市にんにく沢産

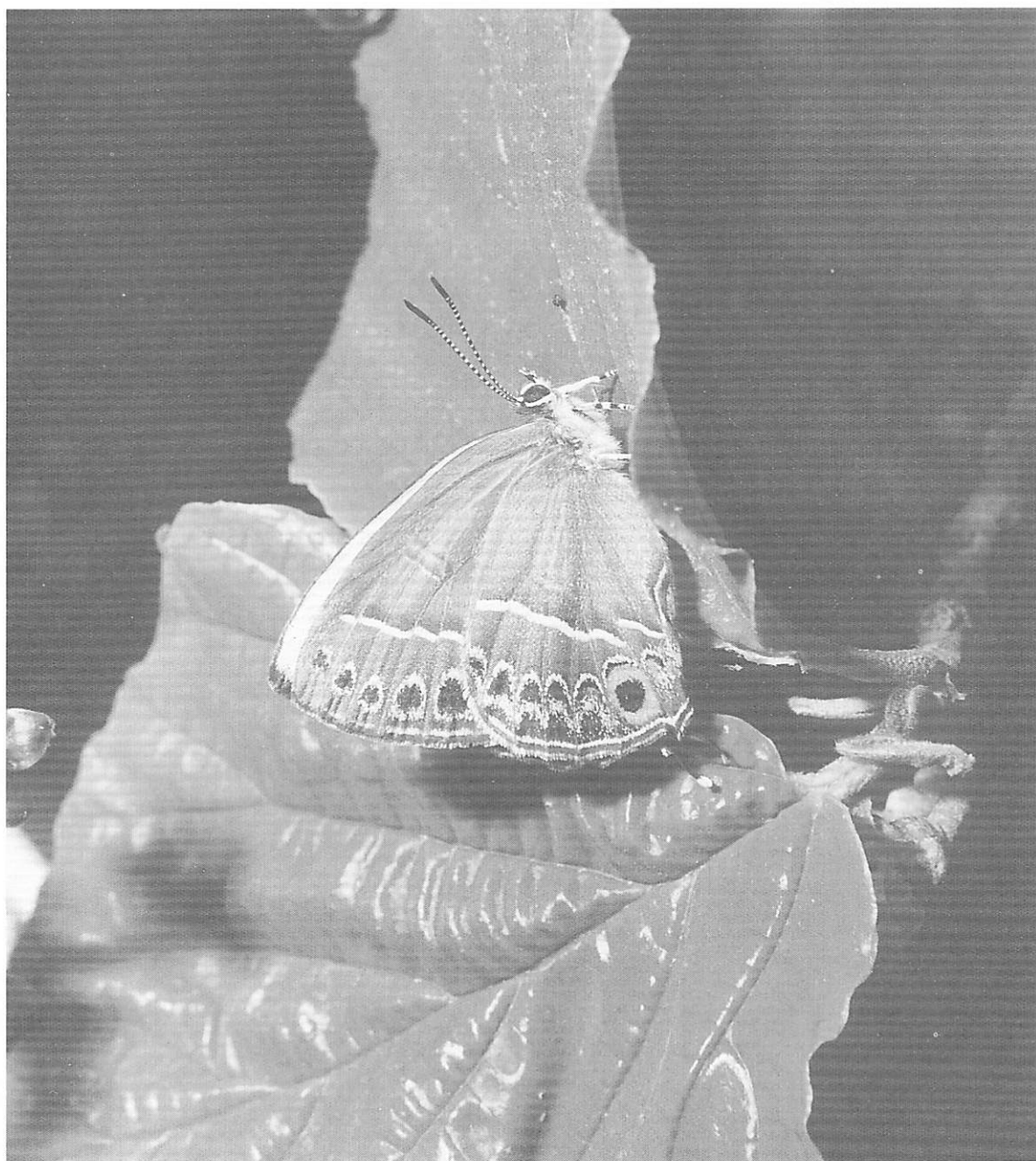


写真8 ウラクロシジミ 木古内町亀川産

ヒメアカタテハ同様に毎年のように渡ってくる常連である。秋にはアザミ類など各種の花で吸蜜する姿が普通に見られる。本州では秋期、群れを作って移動することが知られている。

5 北海道南西部が北限のチョウ

分布の中心は本州にあり、北海道南西部までは分布を広げ土着しているが、道東、道北までは達していないチョウは15種を数えることができる。このうち分布の北限がほぼ渡島半島までとされ、北海道における分布域が最も南に偏って狭くなっているのはウラクロシジミ、フジミドリシジミ、ミヤマカラスシジミ、オオミスジ、ヒメジャノメ、ダイミョウセセリ、スジグロチャバネセセリの7種である。この7種が実質的に渡島半島のチョウ類相を特徴づけているチョウと言うことができ

る。

ウラクロシジミ、フジミドリシジミ、ミヤマカラスシジミの3種の分布は、それぞれ食樹の選択幅が狭いためか食樹の分布によって規制されている。道南で確認されている食樹はウラクロシジミがマルバマンサク、フジミドリシジミはブナ、ミヤマカラスシジミはエゾクロウメモドキである。このうちブナは北限とされる黒松内町付近まで渡島半島には広く分布しているため、フジミドリシジミの分布もブナ帯に限られてはいるが、採集されている地域は広い。マルバマンサク、エゾクロウメモドキの分布は渡島半島でもやや局地的であるため、知られているウラクロシジミ、ミヤマカラスシジミの産地は少なく局地的な分布傾向になっている。

ヒメジャノメが北海道で初めて確認されたのは1953年木古内町であった。その後、道南各地での採集記録が増えていった経緯を見る

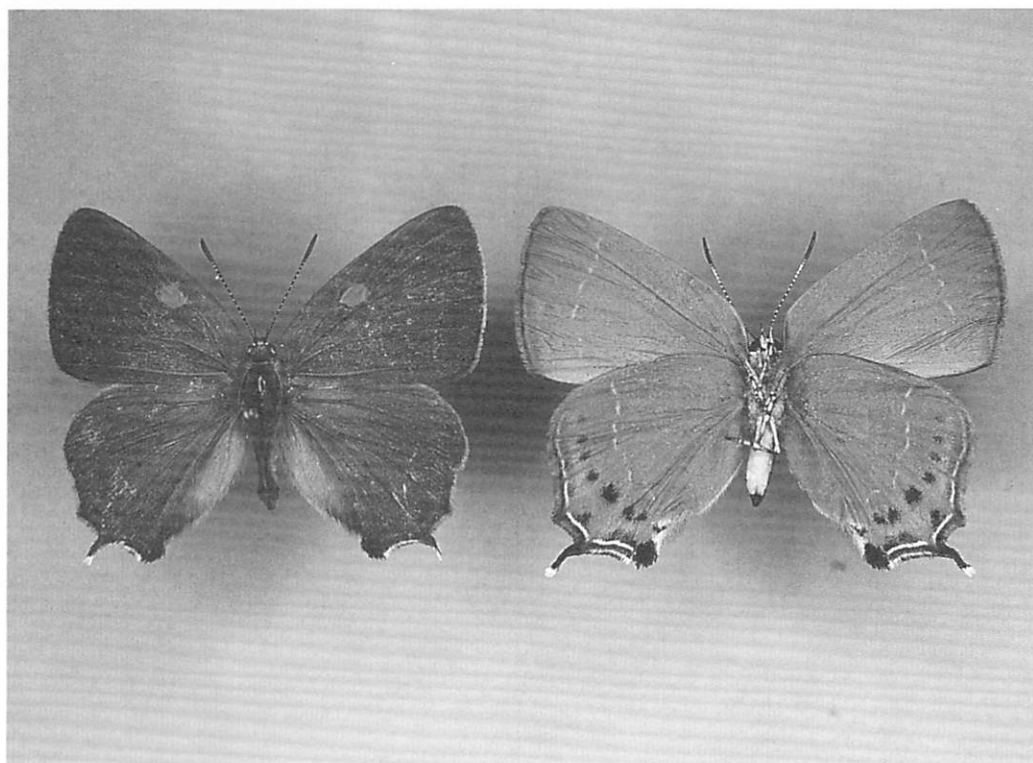


写真9 フジミドリシジミ 恵山町唐川沢産 左オス表面 右メス裏面

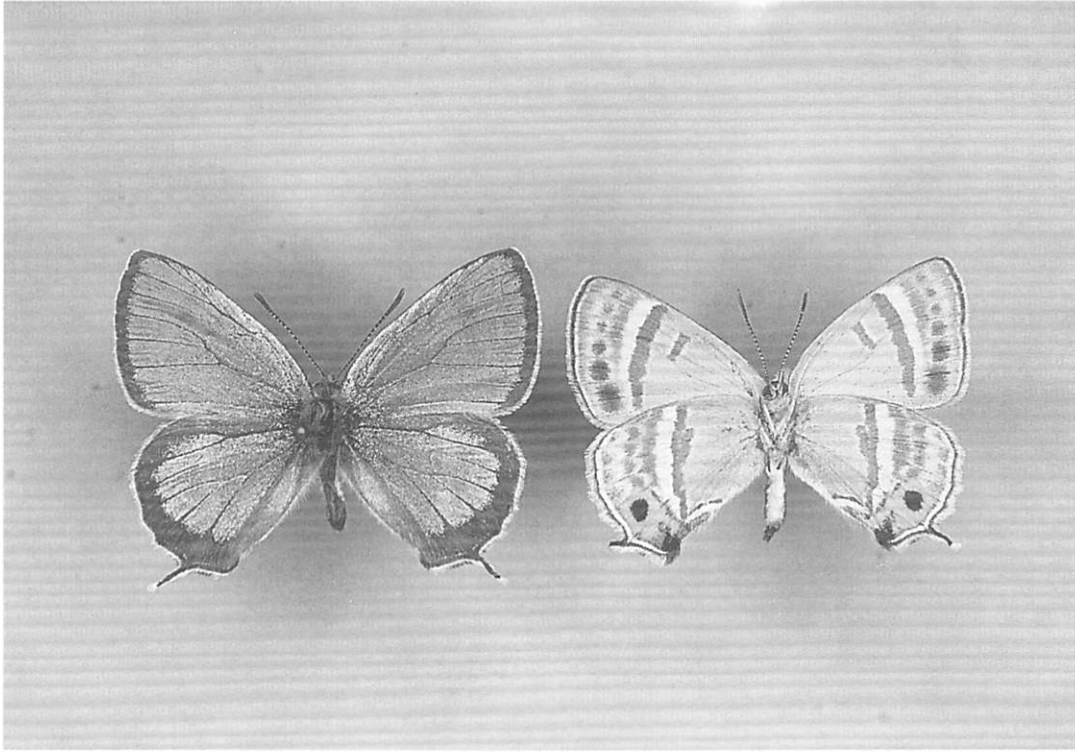


写真10 ミヤマカラスジミ 函館市東山産

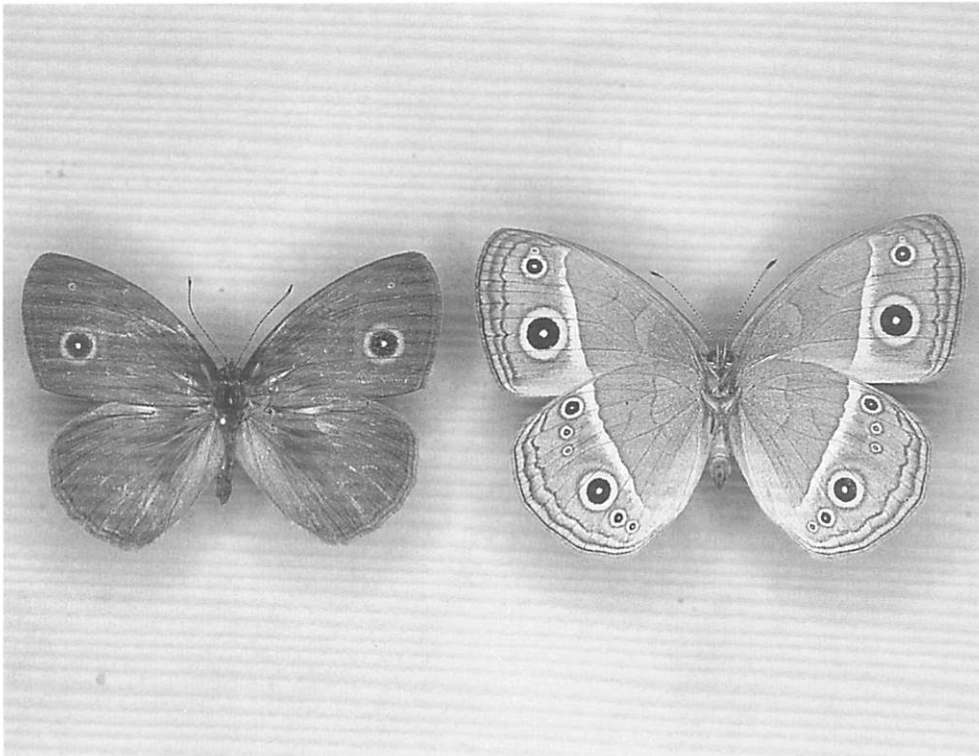


写真11 ヒメジャノメ 乙部町姫川産

と、生息域を徐々に拡大していったように見受けられる。詳しい年代確認の調査はないが手元の資料だけで見て、1960年代頃には函館市付近、1970年代には檜山管内各地まで生息域を拡大していった様子うかがえる。今後も渡島半島で北への分布拡大は確実と考えられる。

渡島半島でのダイミョウセセリの分布域は、先に上げた7種の中では最も狭いものとなっている。松前町から日本海ぞいに熊石町までの間に点々と記録がある。離れて太平洋側では八雲町にも記録がある。知り得た産地はいずれも局地的で広がりを感じられず、年毎の発生個体数も安定していないようである。

オオミスジはウメ類を食樹としていて、採集されるのは人家付近や離農跡地のような場所が多い。そのためウメ類果樹の移植によって本州から移入された可能性が指摘されている。分布記録は渡島半島南部に多いが後志、

胆振両管内にも小数の採集記録がある。

スジグロチャバネセセリは近似種のヘリグロチャバネセセリに比べてかなり南に偏って分布をしている。渡島半島南部の産地では両種が混棲しているところが多いが、北部ではスジグロチャバネセセリの方が急速に衰退している。北限がどのあたりにあるか、渡島半島北部から後志支庁管内南部地域は採集調査が行き届かない地域なので今後の課題の一つとなる。

以上の7種のほかに更に北へ分布域を広げていて、北海道南西部まで分布するチョウにオオゴマシジミ、キタテハ、ゴマダラチョウ、キマダラモドキ、ヘリグロチャバネセセリ、キマダラセセリの6種類がある。

オオゴマシジミの北限は後志管内までであったが、最近になって空知管内で発見され、北限が更新された。渡島半島南部では多産地が多い。

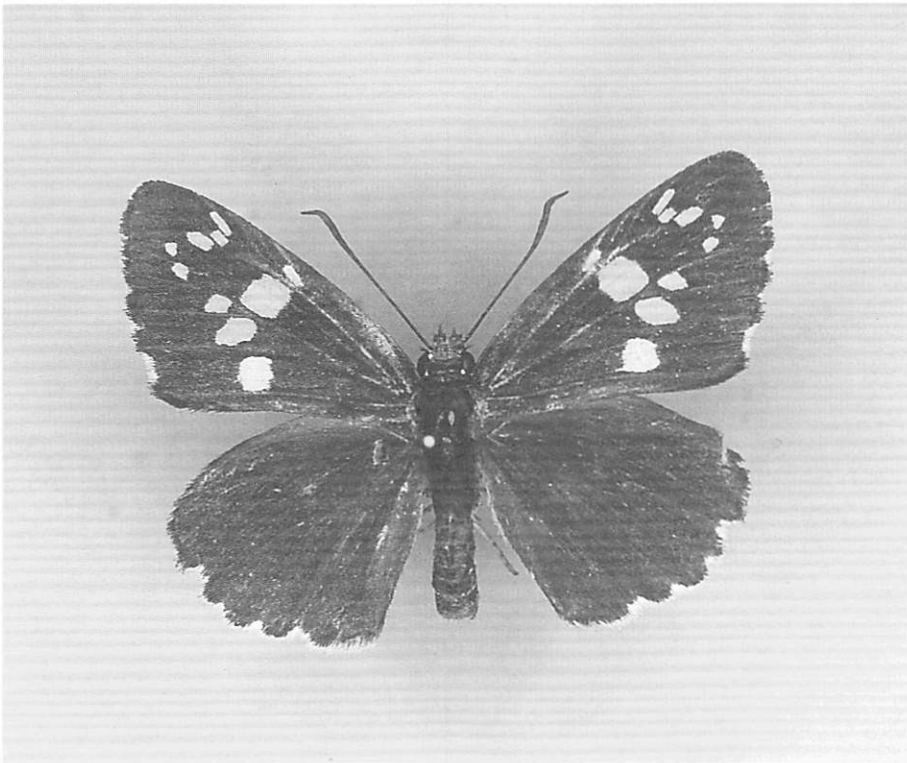


写真12 ダイミョウセセリ 江差町五厘沢産

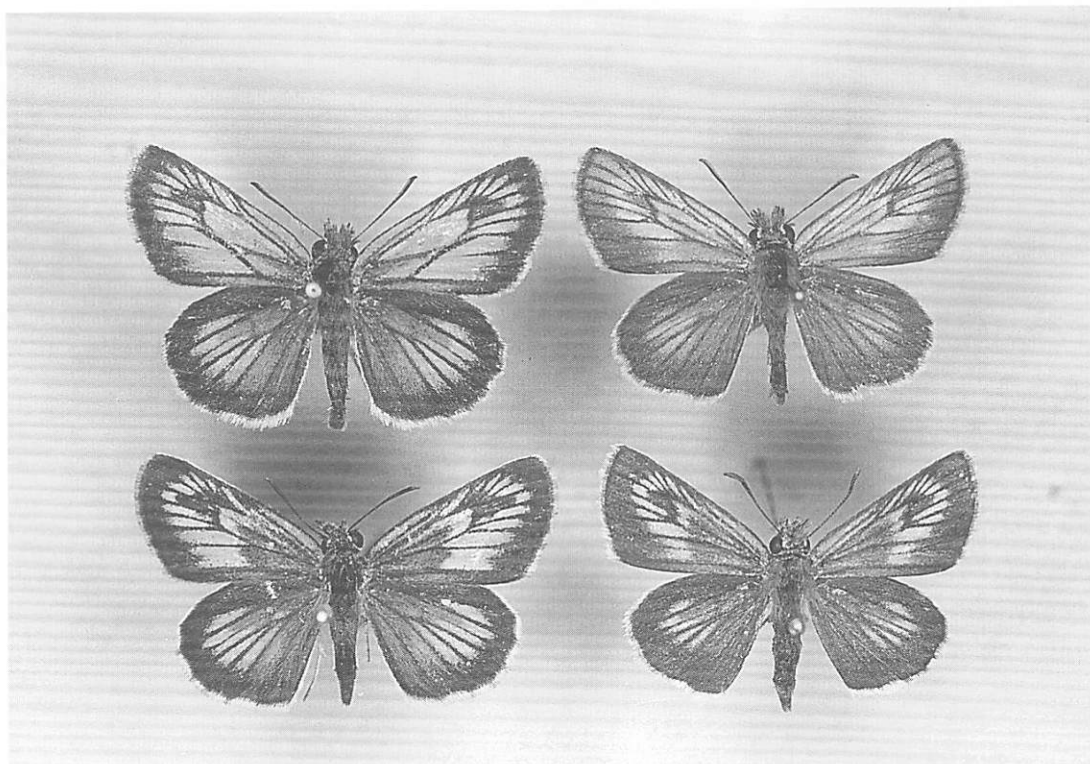


写真13 スジグロチャバネセセリとヘリグロチャバネセセリ

左上スジグロチャバネセセリ	オス	左下	同	メス
右上ヘリグロチャバネセセリ	オス	右下	同	メス

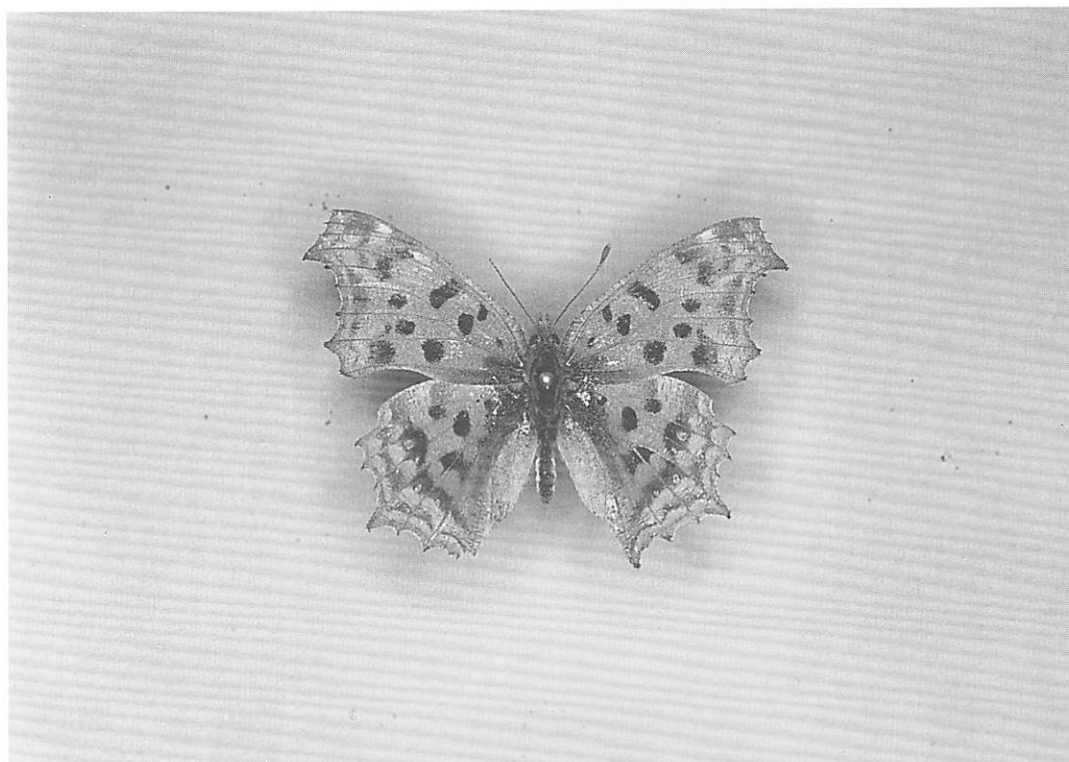


写真14 キタテハ 函館市五稜郭町産

キタテハは1950年代頃までは函館市付近でそれほど珍しいチョウではなかったが、最近ではほとんど目にはできなくなり、生息の消長が大変気になるチョウである。住宅地の開発などによって、食草のカナムグラ、カラハナソウなどが作る藪が減少または消滅したことが原因かとも考えられるがよく分からない。現在確実な棲息地は檜山管内乙部町にある。

道南以北のゴマダラチョウは後志、石狩、空知などに産地が多い。渡島半島で現在確実に生息しているのは上ノ国町早川である。その他に食樹のエゾエノキがある上ノ国神社、上ノ国町石崎の神社でも採集されたと聞いているがその後の消長はよく分からない。古くは函館市、上磯町などでの記録もある。

6 おわりに

北海道南部の渡島半島を特徴づけるチョウについて述べたが、まとめながら渡島、檜山ともに北部での調査不足からくる情報量の少なさが非常に気になることであった。記録や知り得た知見の多くは採集人口の大きな南部に集中している。南に偏って分布するチョウについては特にその北限地域を明確に把握したいものである。また、珍しいチョウや人気の高い種類ばかりではなく、ごく普通の種類についても記録を積み上げていく必要があると思っている。

渡島半島に分布するチョウの総種類数を科別にまとめておく。

	※1	※2
アゲハチョウ科	7	7
シロチョウ科	9	9
シジミチョウ科	33	34
マダラチョウ科	0	1
タテハチョウ科	27	28
ジャノメチョウ科	10	10
セセリチョウ科	10	11
総種類数	96	100

※1は土着の種類数

※2は常習的に渡る4種をふくめた数。

いずれの数も過去に記録がある迷チョウなどは省いた種類数である。

この文を書くにあたり、貴重なウラナミアカシジミの資料、写真を提供していただいた田川眞熙氏、対馬誠氏に感謝申し上げます。

更に、日頃ご指導及び情報、文献の提供などでご配慮いただいている館山一郎、宗像和彦、小松利民、前田俊信、田川眞熙、荒木哲、対馬誠、国兼正明、国兼信之、阿部照男の諸氏にお礼申し上げます。

(日本蝶類学会 会員)

主な引用文献

- 秋野健一, (1954). ヒメジャノメ道南に土着?.
函館昆虫同好会会報 3 : 9
- 猪子龍夫, (1991). 渡島半島の蝶. 北海道の自然
と生物 4 : 43-47
- 猪又敏男, (1990). 原色蝶類検索図鑑. 北隆館.
神田正五・北山勝弘・荒木哲, (1982). 北海道西
部の蝶. 道南昆虫同好会
- 国兼正明, (1990). 北海道上磯郡上磯町の蝶(1).
Celastrina 24 : 25-33.
- 小松利民. (1997). 津軽海峡と昆虫.
Oshimanography 4 : 15-17.
- 田川真熙, (1998). 函館市内でウラナミアカシジ
ミを採集. *jezoensis* 24 : 41.
- 対島誠, (1997). ウラナミシジミの採集記録
jezoensis 24 : 40.
- 永盛拓行・永森俊行, (1988). 渡島支庁、檜山支
庁、後志支庁、胆振支庁管内のコヒョウモンとヒョ
ウモンチョウの分布. *jezoensis* 15 : 7-23
- 本間定利, (1998). オオモンシロチョウの浸入と
その後の経過. *昆虫と自然* 33 : 12, 21-25.

松本コレクション 北海道採集一覽

アゲハチョウ科		Papilionidae			
ウスバキチョウ		Parnassius evermanni daisetsuzanus Matsumura			
1	146	北海道大雪山	♀	14/VII/1954	(From Wakabayashi collection)
2	147	北海道大雪山	♂	18/VII/1963	(大場氏)
ヒメウスバシロチョウ		P. stubbendorffii hoenei Schweitzer			
3	148	北海道北見市・チミケップ	♂	2/VII/1972	Y. Saito
4	149	北海道上川郡上川町愛山溪	♂	4/VII/1972	Y. 松本
5	150	北海道利尻郡利尻町利尻山	♂	5/VIII/1985	T. Y.
6	151	北海道利尻郡利尻町利尻山	♂	5/VIII/1985	T. Y.
7	152	北海道利尻郡利尻町利尻山	♂	5/VIII/1985	T. Y.
8	153	北海道利尻郡利尻町利尻山	♀	5/VIII/1985	T. Y.
キアゲハ		Papilio machaon hippocrates C. Felder & R. Felder			
9	249	北海道函館市赤川*	♀	18/VIII/1974	—
ミヤマカラスアゲハ		P. maackii Ménétériès			
10	312	北海道紋別郡	♂	30/VI/1969	—
11	313	北海道紋別郡紋別	♀	3/VII/1969	M. Hitomi
12	314	北海道紋別郡	♀	28/VII/1969	—
13	315	北海道紋別郡丸瀬布町	♂	23/IX/1969	—
14	316	北海道紋別郡丸瀬布町	♀	10/VI/1970	—
15	317	北海道紋別郡丸瀬布町	♂	28/IV/1973	M. Hitomi
16	318	北海道上川郡上川町愛山溪	♂	3/VII/1972	—
シロチョウ科		Pieridae			
ヒメシロチョウ		Leptidea amurensis (Ménétériès)			
17	331	北海道函館市赤川	♀	7/V/1972	Y. 松本
18	332	北海道函館市赤川	♂	6/VII/1972	—
19	333	北海道函館市赤川	♀	7/VII/1972	—
エゾヒメシロチョウ		L. morsei morsei (Fenton)			
20	341	北海道小樽市銭函石川	♂	16/VII/1973	Y. 松本
21	342	北海道函館市中野ダム	♀	29/VII/1973	Y. 松本
モンキチョウ		Colias erate poliographys Motschulsky			
22	418	北海道札幌市旭山公園	♂	10/X/1971	—
23	419	北海道札幌市旭山公園	♀	10/X/1971	—
24	420	北海道札幌市旭山公園	♀	10/X/1971	—
25	421	北海道札幌市北大構内	♂	9/X/1971	—
26	422	北海道札幌市北大構内	♀	9/X/1971	—
27	423	北海道函館市赤川	♂	5/V/1972	—
28	452	北海道函館市*	♂	7/V/1972	—
29	453	北海道函館市*	♂	7/V/1972	—
ツマキチョウ		Anthocharis scolymus (Butler)			
30	466	北海道函館市美原	♀	4/VI/1972	Y. 松本

エゾシロチョウ		<i>Aporia crataegi adherbal</i> Fruhstorfer			
31	501	北海道北見市・チミケップ	♂	2/VII/1972	Y. Saito
32	502	北海道上川郡上川町愛山溪	♀	4/VII/1972	Y. 松本
33	503	北海道上川郡上川町愛山溪	♀	7/VII/1972	—
34	504	北海道上川郡上川町愛山溪*	♂	4/VII/1972	Y. 松本

モンシロチョウ		<i>Artogeia (Pieris) rapae crucivora</i> (Boisduval)			
35	507	北海道函館市美原	♂	5/V/1972	Y. 松本
36	521	北海道函館市*	♂	7/V/1972	—
37	522	北海道函館市*	♂	—/V/1972	—
38	523	北海道函館市*	♂	4/VI/1972	—
39	524	北海道函館市赤川*	♂	18/VIII/1974	—
40	525	北海道函館市赤川*	♂	18/VIII/1974	—
41	526	北海道函館市赤川*	♀	18/VIII/1974	—
42	527	北海道函館市*	♂	7/V/1972	—
43	528	北海道函館市*	♂	7/V/1972	—
44	529	北海道函館市*	♂	7/V/1972	—
45	530	北海道函館市赤川*	♂	6/VII/1972	—
46	531	北海道函館市赤川*	—	27/VIII/1972	—

スジグロシロチョウ		<i>A. (P.) melete</i> (Ménétrières)			
47	551	北海道函館市赤川*	♂	20/VII/1973	—
48	552	北海道函館市赤川*	♂	20/VII/1973	—
49	553	北海道函館市赤川*	♂	22/VII/1973	—
50	554	北海道函館市赤川*	♂	26/VII/1973	—
51	555	北海道函館市赤川*	♂	18/VIII/1974	—
52	556	北海道函館市赤川*	♂	18/VIII/1974	—

エゾスジグロシロチョウ		<i>A. (P.) napi</i> (Linnaeus) <i>A. (P.) n. pseudonapi</i> (Verity) (北海道亜種)			
53	584	北海道小樽市銭函	♂	4/V/1972	Y. 松本
54	585	北海道函館市美原	♂	5/V/1972	Y. 松本
55	586	北海道函館市美原	♀	7/V/1972	Y. 松本
56	587	北海道函館市赤川	♂	27/VIII/1972	Y. 松本
57	588	北海道函館市赤川	♀	27/VIII/1972	Y. 松本
58	589	北海道函館市赤川	♀	6/VII/1972	Y. 松本
59	590	北海道函館市赤川*	♂	20/VII/1973	—
60	591	北海道函館市赤川*	♂	20/VII/1973	—
61	592	北海道函館市赤川*	♂	20/VII/1973	—
62	593	北海道函館市赤川*	♂	20/VII/1973	—
63	594	北海道函館市中野ダム*	♂	29/VII/1973	—
64	595	北海道函館市中野ダム*	♂	29/VII/1973	—
65	596	北海道函館市中野ダム*	♂	29/VII/1973	—
66	597	北海道函館市中野ダム*	♂	29/VII/1973	—

ウラゴマダラシジミ		<i>Artopoetes pryeri</i> (Murray)			
67	660	北海道函館市赤川	♂	6/VII/1972	—
68	661	北海道函館市赤川	♀	7/VII/1972	—
69	666	北海道函館市赤川*	♂	20/VII/1973	—

ミズイロオナガシジミ		<i>Antigius attila attila</i> (Bremer)			
70	706	北海道勇払郡早来町*	♂	19/VII/1973	—

ジョウザンミドリシジ		<i>Favonius taxila</i> (Bremer)			
71	853	北海道足寄郡足寄町大塚山	♂	17/VII/1973	Y. 松本

72	854	北海道足寄郡足寄町大塚山	♂	17/VII/1973	Y. 松本
73	855	北海道足寄郡足寄町大塚山	♀	17/VII/1973	Y. 松本
74	856	北海道函館市赤川	♂	6/VII/1972	—
		ハヤシミドリシジミ	F. ultramarinus (Fixsen)		
75	875	北海道足寄郡足寄町大塚山	♂	17/VII/1973	Y. 松本
76	886	北海道函館市赤川*	♂	26/VII/1973	—
		トラフシジミ	Rapala arata (Bremer)		
77	893	北海道上川郡上川町愛山溪	♀	4/VII/1972	Y. 松本
		カラスシジミ	Fixsenia w-album fentoni (Butler)		
78	914	北海道函館市赤川	♂	20/VII/1973	Y. 松本
		リンゴシジミ	F. pruni jezoensis (Matsumura)		
79	926	北海道常呂郡訓子府町*	—	22/V/19--	—
80	927	北海道常呂郡訓子府町*	—	27/V/19--	—
		ウラナミシジミ	Lampides boetius (Linnaeus)		
81	965	北海道函館市赤川*	—	20/VII/1973	—
82	966	北海道函館市赤川*	—	20/VII/1973	—
		ツバメシジミ	Everes argiades argiades (Pallas)		
83	1013	北海道函館市中野ダム*	♀	29/VII/1973	—
84	1014	北海道函館市中野ダム*	♀	29/VII/1973	—
85	1015	北海道函館市赤川*	—	27/VIII/1972	—
		メスアカミドリシジミ	Chrysozephyrus smaragdinus smaragdinus (Bremer)		
86	1048	北海道函館市赤川	♂	6/VII/1972	Y. 松本
87	1049	北海道函館市赤川	♂	6/VII/1972	Y. 松本
		アイノミドリシジミ	C. brillantinus brillantinus (Staudinger)		
88	1055	北海道足寄郡足寄町大塚山	♂	17/VII/1973	Y. 松本
89	1056	北海道足寄郡足寄町大塚山	♀	17/VII/1973	Y. 松本
		ルリシジミ	Celastrina argiolus ladonides (de l'Orza)		
90	1072	北海道函館市赤川	♂	5/V/1973	Y. 松本
91	1073	北海道函館市赤川	♀	5/V/1973	Y. 松本
		カバイロシジミ	Glaucopsyche lycormas lycormas (Butler)		
92	1134	北海道函館市赤川	♂	6/VII/1972	Y. 松本
93	1135	北海道函館市赤川	♀	6/VII/1972	Y. 松本
94	1136	北海道紋別郡丸瀬布町*	—	12/VI/1973	—
		ジョウザンシジミ	Scolitantides orion jezoensis (Matsumura)		
95	1137	北海道北見市*	—	12/VI/1983	—
96	1138	北海道北見市*	—	12/VI/1983	—
97	1139	北海道北見市北光*	♀	27/V/1981	—

ヒメシジミ		Plebejus argus (Linnaeus)			
98	1142	北海道函館市赤川	♂	7/VII/1972	Y. 松本
99	1148	北海道足寄郡陸別町川上*	♂	18/VII/1973	—
100	1149	北海道足寄郡陸別町川上*	♂	18/VII/1973	—
101	1150	北海道足寄郡陸別町川上*	♀	18/VII/1973	—
102	1151	北海道勇払郡早来町*	—	19/VII/1973	—
アサマシジミ		Lycaeides subsolanus (Eversmann) L. s. iburiensis (Butler) 北海道亜種			
103	1169	北海道紋別郡遠軽町	—	19/VII/1976	—
104	1170	北海道紋別郡遠軽町*	—	18/VII/1976	—
105	1171	北海道紋別郡遠軽町*	—	19/VII/1976	—
ゴマシジミ		Maculinea teleius (Bergsträsser) M. t. ogumae (Matsumura) 北海道亜種			
106	1176	北海道礼文郡礼文町礼文島	♀	4/VIII/1985	T. Y.
107	1177	北海道函館市美原	♀	9/IX/1972	Y. 松本
カラフトルリシジミ		Vacciniina optilete daisetsuzana (Matsumura)			
108	1192	北海道羅臼岳	♂	5/VIII/1971	Y. Saito
109	1193	北海道羅臼岳	♀	5/VIII/1971	Y. Saito
110	1194	北海道羅臼岳羅臼平	♂	5/VIII/1971	—
111	1195	北海道羅臼岳(?)*	♂	—/—/—	—
タテハチョウ科		Nymphalidae			
ホソバヒョウモン		Clossiana thore jezoensis (Matsumura)			
112	1215	北海道上川郡上川町愛山溪貝	♂	3/VII/1972	Y. 松本
113	1216	北海道上川郡上川町愛山溪貝	♂	3/VII/1972	Y. 松本
114	1217	北海道上川郡上川町愛山溪貝	♂	4/VII/1972	Y. 松本
115	1218	北海道上川郡上川町愛山溪貝	♀	4/VII/1972	Y. 松本
116	1219	北海道上川郡上川町愛山溪貝	♀	4/VII/1972	Y. 松本
カラフトヒョウモン		C. iphigenia (Graeser)			
117	1220	北海道上川郡上川町愛山溪	♂	3/VII/1972	—
118	1221	北海道上川郡上川町愛山溪	♀	3/VII/1972	—
119	1222	北海道紋別郡丸瀬布町*	—	4/VII/1976	—
120	1223	北海道北見市*	—	12/VI/19--	—
アサヒヒョウモン		C. freija asahidakeana (Matsumura)			
121	1224	北海道大雪山	♂	24/VII/1972	H. 松本
122	1225	北海道大雪山	♂	25/VII/1972	H. 松本
ヒョウモンチョウ		Brenthis daphane (Denis & Schiffermuller)			
123	1226	北海道函館市赤川	♂	6/VII/1972	Y. 松本
124	1227	北海道函館市赤川	♂	6/VII/1972	—
125	1228	北海道函館市赤川	♂	15/VII/1973	Y. 松本
コヒョウモン		B. ino (Rottenburg)			
126	1242	北海道足寄郡足寄町大塚山	♂	17/VII/1973	Y. 松本
127	1243	北海道足寄郡陸別町川上	♂	18/VII/1973	Y. 松本
128	1244	北海道足寄郡陸別町川上	♂	18/VII/1973	Y. 松本

ギンボシヒョウモン		<i>Speyeria aglaja</i> (Linnaeus)			
129	1352	北海道足寄郡陸別町川上*	♂	8/VII/1973	—
130	1353	北海道足寄郡陸別町川上*	♂	8/VII/1973	—
131	1354	北海道足寄郡陸別町川上*	♂	8/VII/1973	—
132	1355	北海道足寄郡陸別町川上*	♂	8/VII/1973	—
133	1356	北海道足寄郡陸別町川上*	♂	8/VII/1973	—
134	1357	北海道足寄郡陸別町川上*	♀	8/VII/1973	—
オオイチモンジ		<i>Limenitis populi jezoensis</i> Matsumura			
135	1371	北海道屈斜路湖湖畔	♂	13/VII/1973	K. Kondo
136	1372	北海道足寄郡陸別町川上	♂	18/VII/1973	Y. 松本
137	1375	北海道紋別郡丸瀬布町*	♂	9/VII/1979	—
138	1376	北海道紋別郡丸瀬布町*	♂	10/VII/1979	—
139	1377	北海道足寄郡陸別町川上*	♂	18/VII/1973	—
イチモンジチョウ		<i>L. camilla japonica</i> Ménétrières			
140	1378	北海道函館市赤川	♂	6/VII/1972	—
オオミスジ		<i>Neptis alwina</i> (Bremer & Grey)			
141	1414	北海道函館市赤川	♂	20/VII/1973	Y. 松本
ミスジチョウ		<i>N. philyra excellens</i> Butler			
142	1417	北海道上川郡上川町愛山溪	♂	4/VII/1972	Y. 松本
フタスジチョウ		<i>N. rivularis</i> (Scopoli) <i>N. r. bergmanni</i> Bryk 北海道亜種			
143	1454	北海道上川郡上川町	♂	3/VII/1972	—
144	1455	北海道函館市赤川	♀	20/VII/1973	Y. 松本
アカマダラ		<i>Araschnia levana</i> (Linnaeus)			
145	1459	北海道釧路	♂	9/VI/1974	H. Yokoi
146	1460	北海道上川郡上川町	♂	16/VII/1961	H. 松本
147	1461	北海道上川郡上川町	♂	16/VII/1961	H. 松本
148	1462	北海道上川郡上川町	♀	16/VII/1961	H. 松本
149	1463	北海道北見市緑ヶ丘*	♂	15/VII/1971	—
150	1464	北海道足寄郡陸別町川上*	—	18/VII/1973	—
サカハチチョウ		<i>A. burejana</i> Bremer			
151	1465	北海道上川郡上川町愛山溪	♂	4/VII/1972	Y. 松本
152	1466	北海道上川郡上川町愛山溪	♀	4/VII/1972	Y. 松本
153	1487	北海道北見市・チミケップ*	♀	2/VII/1971	—
シータテハ		<i>Polygonia c-album hamigera</i> (Butler)			
154	1505	北海道札幌市旭山公園	♂	10/X/1971	Y. 松本
155	1506	北海道函館市中野ダム	♂	29/VII/—	—
クジャクチョウ		<i>Inachis io geisha</i> (Stichel)			
156	1520	北海道大雪山	♂	17/VII/1961	Y. 松本
157	1530	北海道足寄郡陸別町川上*	♂	18/VII/1973	—
158	1531	北海道札幌市*	♀	15/IX/1973	—

コヒオドシ		<i>Aglais urticae</i> (Linnaeus)			
159	1560	北海道雌阿寒岳	♂	7/VII/1976	Y. Saito
160	1561	北海道上川郡上川町	♂	17/VII/1961	H. 松本
161	1562	北海道北見市	♂	15/VII/1983	飼育 山根
162	1563	北海道利尻郡利尻町利尻岳	♀	5/VIII/1985	T. Y.
コムラサキ		<i>Apatura metis substituta</i> Butler			
163	1607	北海道函館市美原	♂	9/VIII/1972	Y. 松本
ジャノメチョウ科		Satyridae			
ヒメウラナミジャノメ		<i>Ypthima argus argus</i> Butler			
164	1632	北海道札幌市旭山公園	♂	10/X/1971	Y. 松本
ベニヒカゲ		<i>Erebia niponica</i> Janson			
165	1670	北海道利尻郡利尻町利尻岳	♀	5/VIII/1985	T. Y.
クモマベニヒカゲ		<i>E. ligea</i> (Linnaeus)			
166	1738	北海道利尻郡利尻町利尻岳	♀	5/VIII/1985	T. Y.
167	1739	北海道大雪山	♂	29/VII/1984	T. Y.
168	1740	北海道大雪山	♀	29/VII/1984	T. Y.
ダイセツタカネヒカゲ		<i>Oeneis melissa daisetsuzana</i> Matsumura			
169	1742	北海道大雪山	♂	24/VII/1961	H. 松本
170	1743	北海道大雪山	♂	24/VII/1961	—
171	1744	北海道大雪山	♀	24/VII/1961	—
172	1745	北海道大雪山	♀	24/VII/1961	—
シロオビヒメヒカゲ (北海道東北部亜種)		<i>Coenonympha hero latifasciata</i> Matsumura			
173	1747	北海道釧路郡弟子屈町川湯	♀	12/VII/1973	Kiyotaro
キマダラモドキ		<i>Kirinia fentoni</i> (Butler)			
174	1767	北海道函館市美原	♂	2/VIII/1973	Yuko 松本
175	1768	北海道函館市赤川	♀	9/VIII/1972	—
176	1769	北海道函館市赤川	♀	27/VIII/1972	—
ウラジャノメ		<i>Lopinga achine</i> (Scopoli)			
177	1777	北海道足寄郡陸別町川上	♂	18/VII/1973	Y. 松本
178	1778	北海道足寄郡陸別町川上	♂	18/VII/1973	Y. 松本
クロヒカゲ		<i>Lethe diana</i> (Butler)			
179	1798	北海道函館市赤川*	♂	18/VII/1973	—
ヒメキマダラヒカゲ		<i>Zophoessa callipteris</i> (Butler)			
180	1815	北海道函館市中野ダム*	♂	29/VII/1973	—
181	1816	北海道函館市中野ダム*	♂	29/VII/1973	—
サトキマダラヒカゲ		<i>Neope goscHkevitschii</i> (Ménétrières)			
182	1835	北海道上川郡上川町	♂	3/VII/1972	Y. 松本
183	1836	北海道上川郡上川町愛山溪	♂	4/VII/1972	Y. 松本

セセリチョウ科

Hesperiidae

キバネセセリ

Bibasis aquilina chrysaeglia (Butler)

184	1894	北海道上川郡上川町	♂	17/VII/1961	H. 松本
185	1896	北海道足寄郡足寄町大塚山*	—	17/VII/1973	—

チャマダラセセリ

Pyrgus maculatus maculatus (Bremer & Grey)

186	1928	北海道北見市	♂	11/VI/1983	T. Y.
187	1929	北海道北見市	♂	11/VI/1983	T. Y.
188	1930	北海道北見市	♂	26/VIII/1983	飼育 山根

ギンイチモンジセセリ

Leptalina unicolor (Bremer & Grey)

189	1934	北海道有珠郡壮瞥町昭和新山*	—	20/VI/19--	—
-----	------	----------------	---	------------	---

カラフトタカネキマダラセ

Carterocephalus sylvicola (Meigen)

190	1935	北海道北見市三角点	♂	9/VI/1977	—
191	1936	北海道北見市*	—	12/VI/19--	—
192	1937	北海道北見市*	—	12/VI/19--	—
193	1938	北海道北見市富里*	♂	21/VI/1981	—
194	1939	北海道北見市富里*	♀	21/VI/1981	—

コチャバネセセリ

Thoressa varia (Murray)

195	1944	北海道上川郡上川町愛山溪	♂	4/VII/1972	—
196	1945	北海道上川郡上川町愛山溪	♀	3/VII/1972	—
197	1946	北海道上川郡上川町	♀	3/VII/1972	—

ヘリグロチャバネセセリ

Thymelicus sylvaticus sylvaticus (Bremer)

198	1966	北海道足寄郡陸別町川上	♂	18/VII/1973	Y. 松本
199	1967	北海道上川郡上川町愛山溪	♀	3/VII/1972	Y. 松本

コキマダラセセリ

Ochlodes venatus venatus (Bremer & Grey)

200	1973	北海道上川郡上川町	♂	18/VII/1981	—
201	1974	北海道函館市赤川	♂	3/VII/1972	Y. 松本
202	1975	北海道函館市赤川	♂	27/VII/1972	—
203	1976	北海道函館市赤川	♂	27/VII/1972	—
204	1977	北海道函館市赤川	♂	27/VII/1972	—
205	1987	北海道函館市赤川*	♂	20/VII/1973	—
206	1988	北海道函館市赤川	♂	20/VII/1973	—

ヒメキマダラセセリ

O. ochraceus (Bremer)

207	1989	北海道函館市赤川	♂	27/VIII/1972	—
-----	------	----------	---	--------------	---

• 資料番号は『市立函館博物館蔵品目録』第9集『昆虫篇—松本泰和コレクション標本目録—』に準じている。

• *印が付いている資料は三角紙入りの資料である。

大沼電鉄の足跡

—その1 観光地大沼と大沼電鉄着工まで—

尾崎 渉

はじめに

平成7年度の当館購入資料の中には、大正期から昭和初期に出された各種広告資料が多数含まれている。「献立表 大沼電鉄株式会社指定待合淡路屋食堂 年代不明」（当館蔵受入番号7-222）もそのひとつである。

また、平成10年度に市民の方から寄贈された絵葉書、記念乗車券・スタンプ等の膨大なコレクション資料の中に「大沼電鉄」で作成したと思われる小さな記念スタンプが1点だけ含まれていた。

「大沼電鉄」は、昭和4（1929）年に開業した大沼（現大沼公園駅）～鹿部間の電気軌道で、昭和20年に廃業、その後昭和23年に路線を縮小し再び開業したが、4年後には廃業という短期間のうちに二期に渡り起廃業を繰り返した地方鉄道である。

道南地方において、昭和初期に開業し現在まで現存する私設鉄道・軌道線は函館市交通局の路面電車のみである。

本稿は、いままでほとんど触れられる機会の少なかった「大沼電鉄」について、道南地方における鉄道史のひとつとして新聞記事を中心に沿革を概観し、この電鉄が開業するきっかけにもなった観光地大沼の歴史についても触れることとし、また「大沼電鉄」に関連する道南地方の地方鉄道路線の存亡についてもあわせて検討を加えていきたい。

1 北海道鉄道の開通

大沼地域における明治期の道路状況 北海道では、明治維新前後、けもの道など自然発生的な道路や少々程度のよい山道が主要交通路となっていた。しかし、開拓使による北海道開拓事業推進に必要不可欠な新道の開削が各地で実施されてくる。

大沼周辺で最初に道路らしい道路が通ったのは、明治3（1870）年9月であった。この道路は札幌本府と函館を結ぶ新道の最初に東本願寺の手によって開削されたもので、軍川（現七飯町軍川）から砂原までの四里半（18キロメートル）、幅九尺（約2.7メートル）であった。¹⁾ なお東本願寺により開削された数本の新道のうち難工事といわれた札幌から定山溪を経て有珠に至る「有珠新道」がいわゆる「本願寺道路」と呼ばれている。²⁾

この新道の完成で安政3（1856）年に牛馬が通行できるように改修された藤城（現七飯町藤城）から軍川までの「軍川山道」³⁾とともに砂原、鹿部、軍川方面と函館の交通が改善されこの地域における開発の基礎となった道路と言えるだろう。

明治5年には開拓使により函館、森間11里余に待望の近代的馬車道が完成した。これは開拓使が我が国初の長距離馬車道として着工した「札幌本道」の一路線で、函館から森、森から室蘭まで航路を経て苫小牧、千歳を経由し札幌へ至る45里余が明治6年6月に全線

竣工している。

「札幌本道」の開通後、重要交通路として旅人の往来が増加、蕁菜沼周辺では明治5年に初代宮崎重兵衛が宮崎旅館を開業、⁴⁾以後この地区は明治12年ドイツ皇帝ハインリッヒの来遊や明治14年明治天皇が北海道巡幸で立ち寄るなど⁵⁾外国公人も訪れる観光地として鉄道開通前まで賑わうようになる。

このように大沼地域では明治初期の早い時期から比較的整備された道路が通り、他の地域よりは若干恵まれた状況にあったと言えよう。これは明治18年太政官大書記官金子堅太郎が北海道内を視察し提出した『北海道三県巡視復命書』に「北海道ニ於テ其能ク道路ノ名義ヲ附シテ可ナルモノハ纔ニ函館札幌間四十六里ノ道路アルノミ」⁶⁾とあることから伺い知れることである。

函樽鉄道と大沼 明治13年、我が国で第三の鉄道である幌内鉄道（手宮、札幌間）が開通、この後北海道でも内陸部を中心に鉄道が敷設されていく。本州では明治24年に私鉄の日本鉄道が青森、上野間を開通させ、青函航路を挟みこの鉄道と連絡する道央部と函館間の鉄道建設が望まれてくるようになる。

明治29年函館、小樽間に私設鉄道を敷設する計画が当初は函館区内と下湯ノ川村を結ぶ蒸気鉄道敷設を計画した函湯鉄道、後の函館鉄道株式会社からも出願されたが却下され、⁷⁾同年、函樽鉄道株式会社に函館、小樽間の仮免状がおりている。⁸⁾

鉄道敷設が徐々に具体化してくる中、「札幌本道」で一躍脚光を浴びた蕁菜沼地区とは対照的に農村として開発が始まったばかりの軍川地区に動きが出てきた。

明治31年7月、軍川村で宇喜多農場を創設した宇喜多秀夫外20名により函樽鉄道に停車場設置の陳情書を提出したのである。この陳

情書には「本道ノ如キハ鉄道ノ便否ニ依リ地方ノ発達上大関係ヲ有スルモノナレバ今日ノ利害ヨリハ将来ノ利便ヲ謀ラサルベカラズ因テ停車場ノ位置別紙図面ニ示ス如ク（図面ハ略ス）軍川村西端ノ小沼端ニ於テ設置スルハ最も適当ノコトト信セリ」⁹⁾とあり、さらに鹿部方面から軍川を経由し峠下までの連絡道路開削の予定を挙げ、この道路との連携の上でも軍川に停車場を設置する必要性を述べている。

北海道鉄道の開通 明治32年函樽鉄道株式会社が発足、明治33年11月には社名を北海道鉄道株式会社と変更、政府から1マイルにつき8,000円の割合の補助金を受け翌年から敷設に向けて工事が開始された。¹⁰⁾

宇喜多秀夫は、着工直前の明治34年4月にも再度軍川の停車場の位置について陳情を行い、「農場の中央数万坪を割きて北海道鉄道会社に寄附し停車場の設計あらしむ」¹¹⁾とついに自分の農場の土地の一部を停車場敷地として寄付している。

明治35年6月1日、第一工区函館（亀田）本郷（現渡島大野駅）間が起工、同年11月4日に竣工し12月10日開業、続く明治36年6月28日には本郷、森間が開業、函館、森間が一本のレールで結ばれた¹²⁾。そして宇喜多の尽力による待望の大沼駅が明治36年6月28日軍川地区に誕生した。なお、明治36年開業時の函館、森間の列車本数は、明治36年に発行された『北海道大楽園一名大沼案内』（市立函館図書館蔵）に記載されている「北海道鉄道株式会社函館森間汽車発着時刻表」により4往復が設定されていたことがわかる。

北海道鉄道の開通と大沼駅の設置により、「世人の多くは蕁菜沼を知れども未だ大沼あるを知らず」¹³⁾とあるようにそれまで「札幌本道」の開通後大沼地区で唯一、旅館や学校

などが建てられ開発が進んでいた専菜沼地区にかわり、にわかに軍川周辺が脚光を浴びることになる。「停車場付近には、宇喜多農場、飯田信三、山本己之助、西田季一郎、池田醇、田村力三郎、落合幸助の諸氏風景絶佳の地を競ひて土地を占む、蓋し将来の別荘地なるべし、停車場の対岸には平出喜三郎、田本研造、齋藤又右衛門、石垣隈太郎の諸氏閑雅高燥の地を擇みて占む」⁹⁴ という記述からも駅の開業によって軍川周辺および大沼の開発が進んでくることが伺い知れる。

以上のことから、北海道鉄道の開通は大沼の開発、とりわけ観光的な面で多大な影響を与えたと言えるだろう。人の流れも専菜沼の国道から軍川を通る鉄道に移りそれにより専菜沼地区が衰退、かわりに鉄道沿線の大沼が開発されていくのである。

2 観光地大沼

観光地大沼 北海道鉄道線函館（亀田）、森間開業直後である明治36年7月に敷嶋館より発行された『北海道大楽園一名大沼案内』（前掲）は、観光地として大沼を詳細に紹介した最初の冊子であった。

この冊子を発行した敷嶋館は、その広告によると「大沼御案内所 敷嶋館」となっており、名勝、古蹟、温泉場、遊船場の案内をはじめ釣り道具の貸出、弁当や土産物の販売、果ては子守までもするというまさに至れり尽くせりの大沼の観光案内所的性格の休憩所であったようだ。場所は小沼停車場前とあり鉄道開通により観光客の増加を見込んで大沼駅前に開業したもののひとつであろう。

冊子は大沼周辺の地理から各景勝地、温泉場等事細かに記述紹介しているが、この中で注目されるのは「旅館の設備内外人にして、

甚だ不完全なれば来遊者永く足を止むるを欲せず大沼の発達せざるは、完全の旅館なきも確に一の理由として数ふべし、是れ北海道の大楽園の為め大に注意すべき点なりとす」と大沼が観光地としてさらに発展するために旅館等宿泊施設の整備が必要であると述べている点である。まさに鉄道開通直前まで観光地としての知名度が低く、開発途上の大沼の実態を如実に物語っていると言えるだろう。

大沼公園仮停車場の設置 明治36年、鉄道工事に施設監督として関わっていたといわれる宮川勇が大沼（現大沼公園広場売店付近）に旅館紅葉館を完成、⁹⁵ また、明治38年には堀口亀吉が沼の家として「大沼だんご」を製造販売するなど、徐々にではあるが観光地としての体裁を整えつつあった。

この大沼を当時の北海道会も注目し、道立公園として経営することが適当と認め、明治37年の道会決議を経て、38年より堤防敷地中風景最良地域とこれに接続する未開地・嶋嶼48,779坪を公園予定地として地方費により経営することとなったのである。⁹⁶

明治39年には公園と銚子口を結ぶ道路の開削、公園内の架橋を行なうなど⁹⁷道立公園としての整備が進み、また、明治37年7月には北海道鉄道線の函館、亀田間が開通し旧函館駅を亀田駅と改称、さらに同年10月には小樽、函館間が全通したことも影響し、大沼を訪れる観光客の数も年々増加していった。これは明治40年7月の鉄道国有法による北海道鉄道買収後の明治41年6月1日に北海道帝国鉄道管理局函館運輸事務所が大沼公園仮停車場を開業したことからも伺える。⁹⁸

大沼公園仮停車場の開業は観光客の増加に対応したのは勿論、さらに来訪者の利便性を高め、大沼を知らしめる効果を生じたのである。

道立大沼公園の誕生 大正4(1915)年、観光地として認識された大沼が実業の日本社主催の日本新三景に耶馬溪、三保の松原とともに入選、翌年5月には記念碑が建立され、全国的にも大沼が知られるようになる。¹⁹ こうして大沼は大正期に入り年毎に内外からの来訪者が増加し、さらなる施設整備が迫られた。北海道庁は大正3年林学博士本多静六に実地調査を依頼、それに基づき大沼公園の整備が行なわれ、大正11年には管理、取締の規則を制定、これにより名実ともに道立公園大沼が誕生したのである。²⁰

大正7年、日魯漁業はカナダから取り寄せた銀狐等で大沼に養狐事業を開始、大正10年には事業が本格化して大沼養狐株式会社が設立された。²¹ これが⁽²¹⁾大沼の名勝のひとつとなり民間でも観光地大沼に対する意識が出てくるのである。

大沼公園に関係する鉄道の動きとしては大正9年7月、それまでの大沼駅は軍川駅へ、大沼公園仮停車場は大沼仮停車場へとそれぞれ改称された。大正13年4月29日付「函館日日新聞」には「急行大沼停車」と5月1日から大沼駅に函館本線往復の各急行列車が遊覧客の便宜を計るために停車することを伝えている。当時の急行列車利用客が長距離客であったことから、大正期の大沼は函館以外からの観光客も多かったことをこの記事から読み取ることができる。

また、「大沼遊覧列車毎日運転する」として「大沼遊覧列車は日曜と祭日だけ運転する筈であったが、近頃遊覧客が多く各列車共に甚だ混雑するので本月十日から十月末日迄毎日運転する事になった」⁽²²⁾と函館からの行楽客の多さ、とりわけ平日でも大沼が賑わっていることを物語っている。

大沼公園の賑わい 昭和2(1927)年、東

京日日新聞社が募集した日本新八景に大沼を入選させようとする動きが出てくる。昭和2年4月30日付の「函館日日新聞」記事には、「大沼有志奔走」として堀口亀吉らが函館市役所、渡島支庁、商工会議所に支援を要請したことを伝えている。残念ながらこの日本新八景に大沼公園は落選しているが、関係記事に「函館には大沼の土地所有者が百二十名からいる」とあり、当時の函館財界人等の別荘地、避暑地等にも大沼が広く利用されていたことが伺える。

昭和3年8月26日付「函館日日新聞」記事に「大沼公園稀有の人出」として、大正2年から復活した大沼の年中行事である水難者供養灯籠流しに約4,000人が訪れ、大沼未曾有の人出であったことを伝えている。この中で「遊覧船も不足を告げ折角の清遊も満足を得ずして帰ったものも少なかったのは遺憾であった」とあり、また同紙の別の記事ではこの灯籠流しのために「函館駅初めての編成」である機関車2両牽引で大型ボギー車16両編成が運転され、それでも満員であったことを伝え、「一度に此客を迎えた大沼では遊覧船の不足を告げ団体は勿論一般の遊覧客に満足を與えて呉れなかったばかりか、お土産物なども品切れと言う不体裁ぶりである。日本に誇る水郷大沼としてモウ少し統べての諸設備を完全にしていなくては折角お客さんを見ながら不平不満を與えるばかりで、何等得るところは無かるうものを大沼の諸士も風光を御自慢に安眠を貪らず遊覧客を満足させるという点を考慮し、諸般の設備を期する必要はなかるうか？」⁽²³⁾として、この時の賑わいぶりと受入側である大沼の対応の不味さ、特に施設面での不備、不努力を訴えている点が注目される。

国立公園選定と大沼 昭和6年6月、大沼

公園を一望できる展望塔が傘山（現南大沼公共駐車場横）に完成した。鉄骨造りで高さは百三十尺（約39.4m）であった⁽²⁴⁾。またひとつ大沼の名勝が完成、着実に観光地としての整備が進んだのである。

同年、国は国立公園指定地を全国から選定することを決定、その調査を開始した。大沼も国立公園指定に向け地元のほか函館、湯川をはじめ鹿部、臼尻、砂原等の関係者による調査準備会を発足させ、早速運動を展開している。⁽²⁵⁾ 同年6月21日には内務省囑託の視察者が大沼公園ほか鹿部温泉等を訪れて現地を調査し、「同公園は各種の要件を具備して将来国立公園指定に有望」⁽²⁶⁾と談話を発表している。

その後国立公園調査員一行が7月13日に大沼公園入りし14台の自動車に分乗、大沼周辺および鹿部方面を視察調査にあたった。⁽²⁷⁾ この時の調査員であった観光局長の大沼に対する感想として「内国的にもっと宣伝紹介に努めるのが急務である」⁽²⁸⁾と全国レベルでの宣伝不足を挙げ、また「汽車の如き間だるっこい交通機関を何時までも最上のものと考えてる様では将来の公園の大を望まれず」⁽²⁹⁾として公園発展には自動車が必要不可欠で、函館からの道路および周辺自動車道路の整備が早急に必要と述べ、このほか今でいうところのホスピタリティーについても言及しており、いささか大沼の国立公園指定には厳しい内容となっている。

こうした状況下、道内では阿寒、大雪山が国立公園の指定を受け、大沼公園はその指定から外れてしまったのである。このことは、大沼公園が未だ全国レベルに比して未整備の部分、特に交通面での整備が遅れていたこともひとつの要因であったと考えられよう。

それでも大沼公園は、函館市民の行楽地と

して親しまれ、戦後の国定公園指定となっていくのである。

3 大正期の交通と私設鉄道敷設計画

大沼東部および鹿部村の状況 前述したとおり、北海道鉄道開通によりそれまで農業と漁業のひっそりとした村落であった大沼は一躍観光地として注目を集めることとなったのだが、その周辺地域、特に隣接する鹿部村はどのような状況であったのだろうか。

鹿部村は噴火湾沿岸で漁を営む漁民が住む村であったが、明治28年に大沼から流れる雨罫川上流で硫黄鉱山が発見され、それ以後雨罫川周辺では硫黄鉱山の開発が盛んに行なわれ、小さな小学校も建てられるようになってきた。⁽³⁰⁾ また、明治39年に設立された渡島水電株式会社が鹿部村折戸川上流に大沼第一発電所を明治41年に完成させ、同年8月から函館へ送電を開始している。⁽³¹⁾ 同社は明治41年12月に函館水電株式会社と社名を変更、大正2年には函館市内の馬車鉄道を電車に変更して運転するなど軌道事業も手掛け、大正3年に大沼第二発電所が竣工、同6年には大沼市街地にも電気を供給し、大沼にも電灯が灯るようになった。⁽³²⁾

このように大沼、鹿部間には硫黄鉱山や発電所が操業していたほか、留ノ湯などの古くからの温泉もあり、鹿部村にもまた鹿の湯といったよく知られた古い温泉があり、明治末から大正初期にかけて新たな温泉旅館も開業するなど函館近郊の保養地として開発も始まりつつあった。「鹿部私鉄実測」と題した記事中に「鹿部は石材、海産、農産、硫黄、鉄鉱等の産出物に富み軍川に一年三万噸からの貨物輸送を見る其七割は鹿部発着の物にして旅客の往来も亦逐年増加を示しつつある」⁽³³⁾

とあることからわかるように、大正初めから大沼～鹿部間の交通量は年毎に増加する傾向にあったのである。

また、大正15年6月には鹿部村の元湯といわれている鹿の湯が改築落成しており、⁽³⁴⁾これを契機として「昆布に依りてのみ知られたる鹿部村を更に温泉によって広く社会に紹介し、大沼公園の遊覧客を引付けんとする」⁽³⁵⁾と鹿部村でも温泉地として大沼公園を訪れる遊覧客を誘致しようとする動きが出てきたのである。

馬車から自動車へ 明治37年軍川～鹿部間の道路が起工、⁽³⁶⁾この区間の交通は他地域と同じく馬車によるものとなった。前掲の新聞記事にも「函館本線軍川から鹿部温泉の所在地鹿部に至る交通は従来から馬車を以て往復されつつあり」⁽³⁷⁾とあることから大正中期頃までは馬車が主たる交通機関であったことが伺える。しかし、この馬車もすぐに自動車に変わっていくのである。⁽³⁸⁾

大正15年6月17日から3回にわたり連載された「函館日日新聞」の「鹿部の一夜」という記事に「軍川と鹿部間は約五里で以前は客馬車に依ったものであるが、文明の利器たる自動車が現れると共に影を隠し、今は自動車の独り天下である。自動車は大沼公園に二台、軍川に一台あり共に鹿部への乗合を専業とするものであるが、乗客の多くが軍川駅に下車するため公園のものも今日にては汽車の着く頃には軍川駅に來ている」⁽³⁹⁾と書かれていることから、軍川～鹿部間では大正15年6月には既に客馬車にかわり乗合自動車が走っており、鹿部方面へ行く旅客が軍川駅で下車して乗合自動車へ乗り換えていることがわかる。

軍川～鹿部間の乗合自動車の料金は一人一円、所用時間は晴天の時は40分、雨天の時は

50分から1時間であったという。⁽⁴⁰⁾

大正10年前後、道南各地で乗合自動車や貨物自動車の営業が始まるが、そのほとんどが函館市内または市内と近郊を結ぶ路線が中心で、地方村間を結ぶ路線は珍しく、また、昭和4年に開通した「大沼電鉄」の大沼公園、鹿部間は往復で1円20銭⁽⁴¹⁾であったことを考えると高額な料金であったと言え、「鹿部へ行かんとするものは勢い軍川で下車せざれば大沼にては満員のため折角待っていても乗られないことがある」⁽⁴²⁾ほど利用者があったのは、大沼公園、鹿部が一流の保養地にもなっていたと考えられよう。

渡島軌道出願 大正中期、大沼、鹿部間の交通が盛んとなり、乗合自動車による旅客輸送も始まったが、当時の台数、定員を考慮しても大量輸送交通機関としては成り得ず、他の地域と同様鉄道敷設が考えられてくる。特に幹線として機能している国鉄線（明治40年鉄道国有法により北海道鉄道線国有化）と接続する支線を敷設しようとする動きが目立ってくる。大正2年9月に開業した五稜郭～上磯間の軽便鉄道線もその一つである。

この時期、広域観光地としても知られつつある大沼、鹿部間にも鉄道を敷設しようとする動きが出てくるのも当然の成り行きであったろう。

『鹿部町史』によれば、大正10年10月に函館の大坪五郎ほかが大沼鹿部間軽便鉄道の敷設出願（二呎六寸の馬動力）となっており、大正10年頃より同区間の軽便鉄道敷設が意識されてきたのであろう。

そして大沼電鉄の前身となる「渡島軌道」が出願となる。大正11年2月8日付「函館新聞」に「南渡島半島産業開発に計画せる渡島軌道会社は目下出願中にて軍川駅より鹿部間公共道路に敷設すべく、鹿部七飯村温泉の紹

介と鹿部折戸川尻に船付場を設けて室蘭方面の鮮魚の搬出連絡をもなさんという」と「渡島軌道」が出願中であることを伝えている。

大沼、鹿部間の鉄道敷設計画はこうして具体化してくるが、この記事からも読み取れることは、鉄道敷設によってさらに観光地としての地域発展を考え、付随する新たな事業をも展開するとしている点である。

自動車も新たな交通機関として認められつつあるこの時期、上磯軽便線と上磯セメント会社の例を出し「鉄道の時代に入りたりとの説もあらんも、而も鉄道なる固定的交通機関を設けて果たして営業成立し得るが大なる問題とせられざるを得ず」⁽⁴³⁾と鉄道敷設以前に地域産業の発達があってこそ鉄道の営業が成り立ち、そうでない地域は自動車による輸送が適当であるとの意見も出てきている中、大沼、鹿部間の鉄道敷設が具体化していく点に注目したい。

4 渡島軌道問題と渡島海岸鉄道の開通

渡島軌道株式会社 大正11年に鉄道敷設の出願を行なった「渡島軌道」は、設立事務所を函館市若松町に置いた。⁽⁴⁴⁾

同社の「計画説明書」⁽⁴⁵⁾では「…渡島東海岸沿線ニ於ケル地方開発ノ目的ニテ計画セルモノナリ」と計画理由を説明、さらに「本軌道竣工ノ暁ハ渡島半島東海岸ニ於ケル海産物、鮎物等容易ニ短時間ニテ函館方面ノ市場ニ運搬シ得ベク殊ニ同地方ノ大富源タル同郡鍋谷地ニ産出セル（俗称北海道御影）無尽蔵大宝庫ノ石材輸送ニ多大ノ便を與…」として旅客輸送のほか、海産物、沿線の鮎山産出の鮎物を短時間で函館方面へ輸送できるとしている。

大正11年11月19日付「函館日日新聞」の記事には「渡島国亀田郡七飯村大字軍川村軍川

駅より同国茅部郡鹿部村に至る十哩六分の軌道を敷設して、一般旅客及び貨物の運輸業並びに石材採掘販売業を営む由」と輸送業のほか、石材の採掘販売事業を計画中であることを紹介している。

「渡島軌道」は大正11年12月27日付で特許及び命令書を得、⁽⁴⁶⁾敷設へ向けての準備を開始する。株式会社創立の株主募集も行なわれ、この中で「単に旅客の運輸をなすのみならず、石材の採掘販売業をもなすことを得たるの特典あるを以て他の鉄道会社と異なり将来非常に有望の由」⁽⁴⁷⁾と石材採掘販売の事業権獲得により産業と一体化した鉄道輸送事業を独自で行なう利点を強調している。

渡島軌道をめぐる動き 大正12年8月7日付「函館日日新聞」には「株式募集中の處愈々満株となりたるを以て払込を為し、一方実測に着手せる」と準備が順調であるとともに敷設に向けての実測が始まることを伝えている。また、同紙大正12年10月23日付では「鹿部軽便許可」として道庁へ認可申請中の軽便鉄道が許可となり近日中に工事が着手されるとしている。

ところが、大正12年12月23日付で同社から「工事着手期日延期願」⁽⁴⁸⁾が提出され、最近の財界不況と同年9月に発生した関東大震災によって会社創立が遅延、これにより工事着手期日を当初の大正12年12月26日から同13年4月30日に延期する旨が申請されている。

この申請は許可され工事着手は13年4月30日まで延期されたが、このことが大正13年4月7日付「函館日日新聞」に「渡島軌道株式会社の事業たる軍川駅から分岐し鹿部へ至る私設鉄道工事は認可を得たるを以て工事準備を進むるところ、昨秋の今震災の打撃を蒙り目下計画行悩の状態にあり」と大正12年9月の関東大震災の影響で工事が着手されてい

ないことが報道されている。

この後同社は、大正13年4月23日に「軌道敷設認可願」⁽⁴⁹⁾を提出、軍川～鹿部間にアメリカ・フォード社製ガソリン機関車による軽便鉄道の敷設を目指す。この後事業内容や社名変更など工事が着手されぬまま昭和初期まで推移するのである。

渡島軌道事業と森～砂原間鉄道 軍川、鹿部間の鉄道敷設工事が一向に進展しない中、「渡島軌道」は社長に茨木康三とし重役の大幅な刷新を計っている。⁽⁵⁰⁾ また、ここで注目されるのは「事業方面に於ては森、砂原間の鉄道敷設を計画し道庁に出願し、更に渡島地方漁業家並に一般公衆の為め無線電話の敷設を計画し、本月十二日株式会社安中電気製作所と契約を遂げ、凡ての設計を囑し認可済みの軍川鹿部間新線工事は東京支岐組に請負わせ着手の事に決定」⁽⁵¹⁾と同社の事業として軍川、鹿部間のほかに森、砂原間に鉄道を敷設するという点である。

森、砂原間の鉄道は、昭和2（1927）年12月25日に後述する「渡島海岸鉄道」によって敷設開業されているが、この時の開通祝賀記事に「…鉄道開通速進運動の気運が台頭し来って、たまたま大正十三年七月渡島軌道株式会社社長茨木康三氏が渡島軌道株式会社設立に関する説明書を鹿部村長中西氏に送って来た。其の説明書を町村長会議の節、鹿部中西村長が密かに砂原村長中野氏に示し、鉄道敷設運動を起す事をすすめやがて森の曲萬旅館で茨木氏との会見的一幕となった…」⁽⁵²⁾と開通までの経緯として述べられていることから森、砂原間の鉄道敷設運動の初期段階に「渡島軌道」の強い影響があり、また「渡島軌道」自身も軍川、鹿部間に加えて森、砂原間の鉄道敷設も意図していたのである。

北海拓殖鉄道と茨木社長の信用問題 新た

な事業展開を計るべく茨木康之を社長に迎えた「渡島軌道」は、その後大正13年10月15日臨時株主総会にて社名を「北海拓殖鉄道株式会社」と変更し、本社を大阪市とする届書を道庁へ大正13年11月29日付で提出している。⁽⁵³⁾ このことは大正13年10月29日付「函館日日新聞」でも「渡島軌道改称、百廿五万円増資」として報じられている。

しかし、社名変更から一年も経過せず、大正14年5月25日の株主総会で社名を従前通りの「渡島軌道株式会社」に戻すことを決定、その旨を大正14年6月8日付で届書を提出している。⁽⁵⁴⁾

このように軍川、鹿部間をはじめ新たに敷設を計画した森、砂原間も工事着手が捗らない状況下、「渡島軌道」の茨木康之社長に対する不信感が生じてきた。前述した昭和2年12月25日付「函館日日新聞」の森、砂原間開通祝賀記事にも「…其後一向に着工する模様がないので疑問を抱き、密かに茨木氏の身元を調査して貰うと甚だあやふやである事が知られたので手を引くの止むなきに立至った」と当時の経緯として村長等関係者が「渡島軌道」の森、砂原間鉄道敷設に甚だ疑問を抱き実現不可能とみなしたことを説明している。

この茨木康之に対する信用調査記録が北海道立文書館にある「工事施行認可其ノ他ニ関スル書類 大沼電鉄株式会社 昭和三年」に収められている。これは大正14年4月24日付で大阪市新町警察署で調査したもので「西区新町通五丁目十七番地前田ビルディング内ニ事務所ヲ置キタルハ事実ナルモ別ニ営業セシコトモナク當ダ表向看板ヲ掲ゲ居タルノミ」と事務所と看板の設置のみで営業活動等も行っておらず、資産や信用を知る者も部内にいないことを報告している。

事業の実施自体が危ぶまれる中、前述のと

おり森、砂原間はもちろんのこと軍川、鹿部間の工事着手も危うい状況となってきたのである。

渡島海岸鉄道設立 砂原村等の関係者は、「渡島軌道」による森、砂原間の鉄道敷設の実現に大いなる期待を抱き、気の早い村民の中には、あちこちの土地を物色した者もいたようである。⁽⁵⁵⁾

「渡島軌道」による鉄道敷設が不明確となった時点で、関係者は敷設実現へ向け鋭意努力した模様で、当時の札幌電気軌道株式会社（現札幌市交通局軌道線）社長助川貞二郎に鉄道敷設実現に向け交渉を開始、同氏は大正13年12月には実地調査を行ない、森、砂原間の鉄道敷設は有望と判断、事業の着手を決定した。⁽⁵⁶⁾

大正14年3月22日付「函館日日新聞」には「予て問題となり居りし森砂原間軽便鉄道六哩二分は愈よ進捗し、数日前之が主唱者なる札幌電気軌道株式会社々長助川與次郎氏来森し、旗亭浦島に二三有志と会見し懇談する所ありたるが、経費予算は五十万円也と。尚該鉄道に架設に就て森町の運送業者は営業上極力反対し居れるも森町及び砂原町村民其他附近村民は大賛成にて一日も早く架設されん事を希望し居れば充分懸の見込みなりと」⁽⁵⁷⁾と砂原鉄道問題を取り上げ、森町運送業者の敷設反対意見があるものの、同鉄道の敷設準備が順調に計画が進んでおり、村民らの強い要望で早いうちに実現することを伝えている。

助川貞二郎は大正14年に敷設認可申請を監督官庁に提出、⁽⁵⁸⁾大正15年7月、「地方鉄道ヲ敷設シ旅客貨物ノ運輸ニ関スル一般ノ業務」を目的とする「渡島海岸鉄道株式会社」が正式に設立された。本社は札幌市に置かれている。⁽⁵⁹⁾

渡島海岸鉄道開業 「渡島海岸鉄道」は認

可を受け大正15年5月から着工を開始、竣工は同年10月末日の予定であった。⁽⁶⁰⁾このように起業から工事着手までを短期間で実現したのは当時でも「鉄道敷設要望の実現されたもののうちレコード破りの短日月で具体化した」⁽⁶¹⁾というくらいに早かったのである。

しかし着工後の工事は、当初の計画より若干遅れて進んだようで、昭和元年12月28日付「函館日日新聞」では昭和2年6月の竣工を伝えている。ただこの記事で森、砂原間の鉄道を「渡島軌道株式会社」によるものとしており、まだ当初の混乱が尾を引いて報道にも誤解を与えていることが伺える。さらに興味深いのは同区間が竣工次第、砂原、鹿部間に着手、その後鹿部、軍川間に延長する計画と駒ヶ岳登山汽車も計画中であると報道している点である。駒ヶ岳登山鉄道は実現しなかったものの、駒ヶ岳観光を考えた鉄道敷設予定はじつにおもしろい計画であったと言える。

昭和2年11月には国鉄線の森駅との連絡線を除く工事がほぼ完了、「森駅との接続が来年の四月頃ならでは完全しないが、過渡期の施設として東森に仮停車場を設け森まで徒歩にて連絡することになった。尚手小荷物扱は森駅の合同運送会社に請負はしめ連帯輸送することになったが当分の内馬車にて輸送する筈である」⁽⁶²⁾と森駅までの全通前に東森、砂原間の営業を開始することとなった。

「渡島海岸鉄道」の東森、砂原間の開通は昭和2年12月25日で、営業マイル6マイル、料金片道26銭で一日4往復の列車が走ることとなったのである。⁽⁶³⁾軌間は3フィート6インチ（1,067mm）と国鉄線と同軌間を蒸気列車が走ったのである。

渡島海岸鉄道全通 未開通であった渡島海岸鉄道の森、東森間連絡線は昭和2年12月に工事施行認可が下り直ちに着手、昭和3年9

月に完成し、同月11日付で認可を受け同13日に遂に森、砂原間が全通した。⁽⁶⁴⁾

開通式は10月22日に砂原村砂原尋常小学校で盛大に挙行され、森町では開通祝賀会が開催されている。⁽⁶⁵⁾

この鉄道が開通する以前の砂原村では、唯一の交通機関であった馬車が「車馬賃が著しく高く、粕二十九貫一表が中距離の場所で四十銭乃至五十銭の賃金を要し、鮮魚の如きは車一台にまとまらない場合が多いが、それでも一台分の運賃を支払うことを余儀なくされていた。一台分の運賃は三円五十銭乃至五円これは晴天の時価で、道路が悪くなると増賃される。従って荷主は運賃に常に追われて殆ど得る所僅少なものであった。搬出の不便や推して知るべしであるが更に一つの悩みは漁村である関係から搬入される荷の多くは大貨物であって、荷受人は負担に堪えない程莫大な運賃を負わされていたのである」⁽⁶⁶⁾と高価な運賃で輸送コストが高くなり、海産物等の価格が高騰し経済上由々しい問題となっていたのである。

しかし、この鉄道の開通によりこの大きな問題も一掃され、砂原村の物流に大きな変革をもたらした。「渡島軌道」の軍川、鹿部間より遅くに計画され、しかも同社によって当初は計画され、その後に「渡島海岸鉄道」となって速やかに敷設されたこの鉄道は、鉄道省に買収される昭和20年1月まで営業されるのである。

5 大沼電鉄の着工

軍川駅から大沼駅へ 「渡島軌道」による軍川、鹿部間の鉄道敷設工事は、前述したような種々の問題等により認可を受けてから一向に着手されず時間だけが過ぎていった。

こうした中、大正14年7月に大沼公園の堀口亀吉（沼の家）ほか25名が「渡島軌道」に対し、大沼側の起点駅を軍川駅前から大沼駅前に変更されたい旨の陳情書を提出した。

この陳情書では、近年観光地として知られてきた大沼の玄関口で省線の急行列車も停車する大沼駅に起点を変更することにより留ノ湯方面への旅客誘致が可能で「渡島軌道」線の利用も増え、観光地大沼にも有利となることから、自分達も「渡島軌道」に対して相当な便宜を計れるとしている。⁽⁶⁷⁾

この陳情書を受けた「渡島軌道」では、まず大正15年7月北海道庁宛てに工事施行認可の変更願を提出、社会的背景からの理由として二呎六吋（762mm＝軽便鉄道標準軌間）軌道の馬車鉄道を三呎六吋（1,067mm）の蒸気鉄道または電気鉄道に変更するとしている。続く同年10月には工事延期願を提出、敷設予定区間には既に旅客自動車が運転され、馬車鉄道では競争にならず電車鉄道に変更、合わせて起点を大沼駅に変更するための調査中でそのため工事竣工期日を大正16（昭和2）年6月30日まで延長するというものであった。この願出はすぐには認可されず、昭和2年1月に再度提出している。⁽⁶⁸⁾

この動力変更には、沿線に函館水電の発電所があり、豊富で安定した電力の供給が見込まれることも背景として考えられるだろう。**具体化する鉄道敷設計画** 札幌市に本社を置いた「渡島軌道」は、大沼、鹿部間の電気鉄道として敷設計画を進めることとなった。

この変更は自動車の影響が大きいとされ、敷設が本格化する昭和3年7月にも「尾札部自動車」による大沼、鹿部、臼尻間の乗合自動車が許可となっており、⁽⁶⁹⁾既にこの区間は自動車の影響が強くなってきているのである。馬車鉄道では到底自動車には太刀打ちできず、

動力変更は当然の成り行きと言えるだろう。

昭和2年6月14日付「函館日日新聞」には堤清六らが出席した準備協議が13日に行なわれ、「二十五万円資本の渡島軌道会社を更に五十万円を増資して第一期事業として大沼、鹿部間に電車を敷設し、次で函館、大沼間敷設にあるが役員の大体は社長堤清六氏、取締役以太刀川、兵藤、岡本（康）、岡本（忠）其他の諸氏にして小熊幸一郎氏を相談役」と決定したことが報道されている。この時の協議で大沼、函館間に省線があるにもかかわらず独自の路線を敷設する計画があったことも注目される。

この協議の後「渡島軌道」は昭和2年6月15日鉄道省に「動力変更並線路及工事方法変更認可申請書」を提出した。⁽⁷⁰⁾

昭和2年7月には鉄道省の現地調査が行なわれ観光面でも有望な鉄道とされ、⁽⁷¹⁾ いよいよ敷設へ向けての準備が本格化するのである。昭和2年11月13日付「函館日日新聞」には路線変更の実測も完了し、11月中には工事入札を行なう予定であることを伝えている。

敷設へ向け具体化する動きの中で注目されるのは「渡島軌道」による沿線の温泉および地質調査が行なわれた点であろう。同社の委嘱を受けた帝国大学地質学の福富博士による調査が昭和2年11月26日から実施するという記事が「函館日日新聞」昭和2年11月25日付で報道されている。これは「渡島軌道」がこの路線を観光路線として開発する具体的な表れと考えられよう。

起点駅変更に対する七飯村の対応 「渡島軌道」から出された起点を軍川駅から大沼駅に変更する計画は道庁で協議され、七飯村に諮問案が提示された。

この諮問案を巡り七飯村議会では波紋を呼び、一時協議が延期される事態となったので

ある。しかし昭和2年11月19日付「函館日日新聞」に「種々の誤解や利害の関係で去る八日の村会に於て保留となりし渡島軌道株式会社の大沼駅より鹿部の路線変更に関する道庁諮問案は、最初各議員に其趣旨が徹底を欠いて居た為め延期となったが、十八日の村会に於ては十分に其意味が会得出来たので大々の賛成を表し地方発展の為に会社へ信頼する意味の希望まで付して満場一致可決した」とあるように、七飯村では基本的にこの変更案に賛成することとなり答申書が出された。その主な内容は、遊覧客の混雑を防止するため基点を大沼駅前から紅葉館門前に変更すること、希望条件としては起点を軍川駅に戻す、これが不可能であれば本線敷設と同時に軍川駅まで支線を敷設することというものであった。⁽⁷²⁾

大沼、鹿部間鉄道の競合問題 大沼、鹿部間の鉄道敷設が具体化した昭和2年、「渡島海岸鉄道」も順調に工事が進展し砂原、東森間が開通間近の状況であった。同社は開通後に砂原、鹿部、軍川間に路線延長する計画を表明、これは「渡島軌道」線と完全に競合することとなった。

この問題に関する記事が昭和2年11月17日付「函館日日新聞」に掲載されている。この記事によれば「渡島海岸鉄道株式会社にては起工中にあった砂原、森間の鉄道も近く開通するので第二の計画として砂原より鹿部、鹿部より軍川へ通ずる軌道とするらしいが、一方渡島軌道会社は鹿部大沼間の軌道敷設を計画其筋に願出て許可あり次第起工する段取りになっている」と両社の競合を伝え、また「同一箇所二線の経営は主義として許されぬことになっているので、当局としては此の際両者の間に立って斡旋妥協せしめ両会社の合同経営にするか若しくは何れかの会社に依っ

て経営さるる様努めるらしい」と同区間の鉄道敷設は二社は認めないという当局の意向も伝えている。

競合問題は「渡島軌道」に危機感を抱かせたようで、昭和2年11月28日に函館市内の4新聞、2支局を集めて大沼、鹿部間の電鉄事業着手決定の意向を伝え、「将来に於て経済上の問題と時勢の推移に依っては或は合併の事あるやも斗り難いが」との含みを残しながらも「渡島海岸鉄道」との合併等の噂を否定し、同社単独による電鉄敷設を行なうことを説明した。⁽⁷³⁾

この後の調整がどうついたかは残念ながら新聞記事等では明らかにできなかったが、昭和2年12月、「渡島軌道」が先に鉄道省へ提出していた「動力変更並線路及工事方法変更認可申請」が昭和3年6月15日までに工事を着手し、昭和4年12月15日までの竣功ということで認可されたことで、⁽⁷⁴⁾ 大沼、鹿部間は事実上「渡島軌道」に決定されたと見てよいだろう。その後、両社の間に合併問題などは発生していない。

大沼電鉄起工式 着工認可を受けた「渡島軌道」は、昭和3年4月15日に工事着手した旨の「工事着手届」を4月16日付で道庁に提出した。⁽⁷⁵⁾

昭和3年5月7日付「函館毎日新聞」には「大沼電鉄起工式」として6日に大沼駅前で大規模に起工式が開催されたことを伝え、また7日付「函館毎日新聞」はこの起工式の模様を写真入りで紹介、「工事は五月から六月七月との三ヶ月間で竣工八月には開通を見ることになり、この夏から秋へかけて一般遊覧客に利用されるであろう」と3ヶ月の工期で竣工、開業する予定であることを伝えた。

この記事では鹿部までの路線の概要を「大沼公園停車場上りホール横を起点として遊覧

道路を湖畔に沿って走り、銚子口から大沼温泉留の湯を通り更に第一第二第三発電所前を通り鹿の湯付近まで敷設」と風景の富んだ場所のみを走ると紹介している。また、「第二期として鹿部村尾札部間十哩及び大沼函館間十七哩の工事を計画しこれと同時に附帯事業としては諸般の事業を経営」と紹介、この時点でも函館までの路線延長計画と鹿部、尾札部間の新規路線計画を持っていたことが注目される。

渡島軌道から大沼電鉄へ 昭和3年5月6日に起工式を行なった時点から各新聞社の記事で社名が「渡島軌道株式会社」から「大沼電鉄株式会社」に変更となっている。これは残念ながらいつの時点で変更となったかを示す資料が見つけれず明らかにはできなかったが、昭和3年4月に道庁へ提出した「工事着手届」が「渡島軌道」のままであり、その後5月の起工式を紹介した前述の「函館毎日新聞」記事に「社長には本道実業界の重鎮薮七氏就任、専務には北海土地株式会社長平山午介氏、常務取締役には伊藤徳太郎、宮崎芳作の両氏が当り、其他の重役には小樽横山庄右衛門、苫小牧小保方卯市、函館堤清六、北見阿木武兵衛、大野鍵谷万次郎、札幌船谷輔俊、函館太刀川善吉の諸氏あり、相談役には東京の早川鉄治氏及び函館の小熊幸一郎の両氏があるのが何れも本道実業家としては錚々たる人々にて渡島半島開発のために努力することになった」と社長以下会社役員就任を紹介していることから、4月下旬頃に総会が開かれ社名が変更されたものと推察される。

なお、昭和3年8月13日付で道庁へ提出された「動力変更及線路工事方法変更申請書訂正加除届」⁽⁷⁶⁾には「渡島軌道株式会社改メ大沼電鉄株式会社」となっている。

昭和3年5月7日付「函館毎日新聞」の記

事には「大沼鹿部間の鉄道も近く着工する筈でこれも年内には開通が出来る筈で近き将来には魚類の集散地たるべき運命を有する」と大沼電鉄の開通により鹿部村が漁業の中心地となり、このため鹿部村の船入間築設を道庁へ陳情するとしている。「大沼電鉄」開通に対する鹿部村の期待が大きいことが伺い知れる記事と言えよう。

こうして、紆余曲折を経て大沼、鹿部間の鉄道が函館水電から最大300キロワットの電力を供給を受け、⁽⁷⁷⁾ 電気軌道としての開業へ向けて工事が開始されるのである。

〈次号へ続く〉

(市立函館博物館 学芸員)

註

- (1) 南木寿・高嶋章『東本願寺北海道開教史—特に本願寺街道を中心として—』 函館大谷高等学校宗教部 平成1年
- (2) 『新北海道史』第三卷通説二 北海道 昭和46年
- (3) 梅木通徳『北海道交通史』 北方書院 昭和35年
- (4) 『七飯町史』七飯町 昭和51年
- (5) 註(4)に同じ
- (6) 註(2)に同じ
- (7) 地方鉄道文書「函館鉄道」 明治29年～明治31年 交通博物館蔵
- (8) 『函館市史』 通説編第二卷 函館市 平成2年
- (9) 西田季一郎『北海道大楽園一名大沼案内』 敷嶋館 明治36年
- (10) 註(8)に同じ
- (11) 註(9)に同じ
- (12) 『北海道鉄道百年史』上巻 日本国有鉄道北海道総局 昭和55年
- (13) 註(9)に同じ
- (14) 註(9)に同じ
- (15) 註(4)に同じ
- (16) 『北海道の国立公園と景勝地』 北海道景勝地協会 昭和11年
- (17) 註(4)に同じ
- (18) 註(12)に同じ
- (19) 永井正『物語大沼小史』 永井正 昭和35年
- (20) 註(16)に同じ
- (21) 註(19)に同じ
- (22) 大正15年8月6日付「函館日日新聞」
- (23) 昭和3年8月26日付「函館日日新聞」
- (24) 昭和6年6月9日付「函館毎日新聞」
- (25) 昭和6年6月20日付「函館毎日新聞」
- (26) 昭和6年6月23日付「函館毎日新聞」

- (27) 昭和6年7月15日付「函館毎日新聞」
- (28) 註(27)に同じ
- (29) 註(27)に同じ
- (30) 『鹿部町史』 鹿部町 平成6年
- (31) 『函館市史』通説編第三巻 函館市 平成9年
- (32) 註(4)に同じ
- (33) 大正12年8月7日付「函館日日新聞」
- (34) 大正15年6月17日付「函館日日新聞」
- (35) 大正15年6月20日付「函館日日新聞」
- (36) 註(30)に同じ
- (37) 註(33)に同じ
- (38) 『鹿部町史』(鹿部町平成6年)では鹿部、大沼間の乗合自動車開通を大正14年5月としている。
- (39) 註(34)に同じ
- (40) 註(34)に同じ
- (41) 昭和4年1月7日付「函館日日新聞」
- (42) 註(34)に同じ
- (43) 大正11年12月29日付「函館新聞」
- (44) 大正11年11月19日付「函館日日新聞」
- (45) 「昭和三年 工事施行認可其ノ他ニ関スル書類 大沼電鉄株式会社」 北海道立文書館蔵
- (46) 註(45)に同じ
- (47) 大正12年4月4日付「函館日日新聞」
- (48) 註(45)に同じ
- (49) 註(45)に同じ
- (50) 大正13年9月22日付「函館日日新聞」では社長名を茨木康三としているが、「昭和三年 工事施行認可其ノ他ニ関スル書類 大沼電鉄株式会社」(北海道立文書館蔵)では茨木康之と各書類に記載しており、単なる新聞記事の誤字と思われる。
- (51) 大正13年9月22日付「函館日日新聞」
- (52) 昭和2年12月25日付「函館日日新聞」
- (53) 註(49)に同じ
- (54) 註(45)に同じ
- (55) 註(52)に同じ
- (56) 註(52)に同じ
- (57) 大正14年3月22日付「函館日日新聞」に札幌電気軌道株式会社社長を助川貞次郎としている。また、別な同紙記事中では助川貞次郎と記載しているが、「地方鉄道関係書類 道路課 渡島海岸鉄道 其ノ一」によれば助川貞二郎となっており、これも新聞報道の誤りであろう。
- (58) 昭和3年10月24日付「函館新聞」
- (59) 「地方鉄道関係書類 道路課 渡島海岸鉄道 其ノ一」 北海道立文書館蔵
- (60) 大正15年4月13日付「函館日日新聞」
- (61) 註(62)に同じ
- (62) 昭和2年11月18日付「函館日日新聞」
- (63) 昭和2年12月24日付「函館日日新聞」
- (64) 註(59)に同じ
- (65) 昭和3年10月23日付「函館日日新聞」
- (66) 註(52)に同じ
- (67) 註(45)に同じ
- (68) 註(45)に同じ
- (69) 昭和3年7月28日付「函館日日新聞」
- (70) 註(45)に同じ
- (71) 註(69)に同じ
- (72) 註(45)に同じ
- (73) 昭和2年11月29日付「函館日日新聞」
- (74) 註(45)に同じ
- (75) 註(45)に同じ
- (76) 註(45)に同じ
- (77) 註(45)に同じ



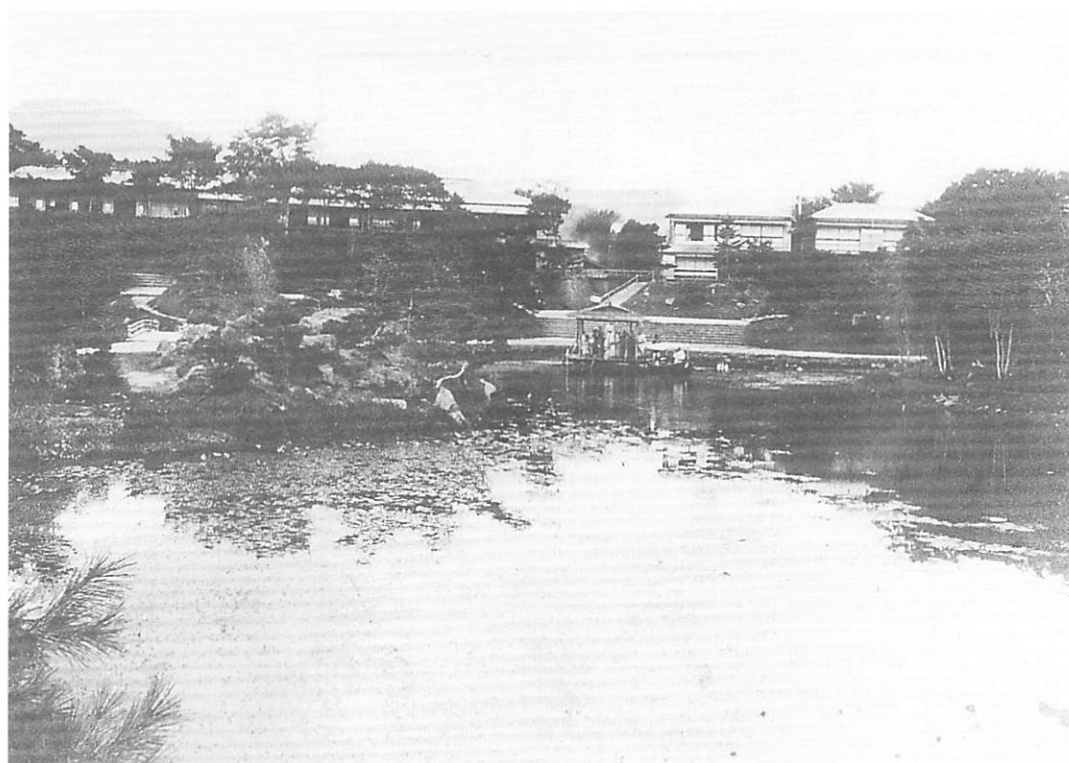
昭和6年6月大沼公園傘山に完成した
展望塔と大沼

〈七飯町歴史館蔵〉



大沼展望塔

鉄骨造りで高さ約39m。昭和18年に軍用資材
供出により姿を消した。 〈小林利男氏蔵〉

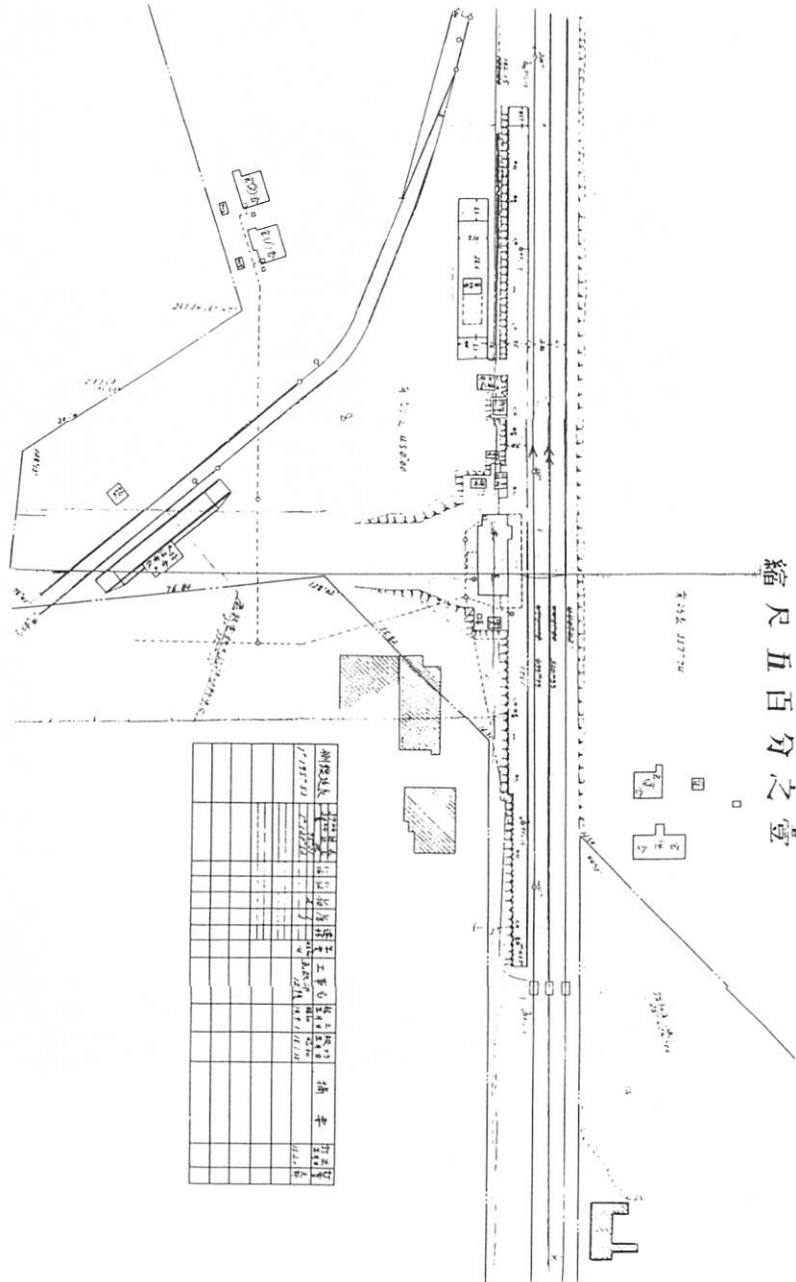


大沼湖畔の第一紅葉館・第二紅葉館全景

〈七飯町歴史館蔵〉

大沼停車場設備圖

縮尺 五百分之壹



種別	面積	用途	備考
1	1,100.00	駅舎	
2	1,100.00	待合室	
3	1,100.00	事務室	
4	1,100.00	検車庫	
5	1,100.00	油庫	
6	1,100.00	材料庫	
7	1,100.00	事務所	
8	1,100.00	倉庫	
9	1,100.00	車庫	
10	1,100.00	事務所	
11	1,100.00	倉庫	
12	1,100.00	車庫	
13	1,100.00	事務所	
14	1,100.00	倉庫	
15	1,100.00	車庫	
16	1,100.00	事務所	
17	1,100.00	倉庫	
18	1,100.00	車庫	
19	1,100.00	事務所	
20	1,100.00	倉庫	
21	1,100.00	車庫	
22	1,100.00	事務所	
23	1,100.00	倉庫	
24	1,100.00	車庫	
25	1,100.00	事務所	
26	1,100.00	倉庫	
27	1,100.00	車庫	
28	1,100.00	事務所	
29	1,100.00	倉庫	
30	1,100.00	車庫	
31	1,100.00	事務所	
32	1,100.00	倉庫	
33	1,100.00	車庫	
34	1,100.00	事務所	
35	1,100.00	倉庫	
36	1,100.00	車庫	
37	1,100.00	事務所	
38	1,100.00	倉庫	
39	1,100.00	車庫	
40	1,100.00	事務所	
41	1,100.00	倉庫	
42	1,100.00	車庫	
43	1,100.00	事務所	
44	1,100.00	倉庫	
45	1,100.00	車庫	
46	1,100.00	事務所	
47	1,100.00	倉庫	
48	1,100.00	車庫	
49	1,100.00	事務所	
50	1,100.00	倉庫	

「大沼停車場設備圖」

昭和15年頃の大沼駅（現大沼公園駅）と大沼電鉄線の配線・設備図。

この図で大沼電鉄大沼公園駅ホームが現在の大沼公園駅前の道路上にあったことがわかる。

〈市立函館図書館蔵〉

▲合待定指社會式株鉄電沼大

**今日の献立が出来ましたから
御試食下さい**

<p>▲名物料理の部</p> <p>鮎味汁 一人前 二十五銭 鮎焼 一人前 二十五銭 御辨當 全 二十五銭 御仕度 全 二十五銭 朝食 (九時迄前) 一人前 二十五銭 鳥なべ 一人前 二十五銭 湯豆腐 一人前 二十五銭</p> <p>●ビール 一本 四十五銭 サイダー 全 二十銭 白めし 全 二十銭 御肴小鉢物 二十銭</p> <p>団体十人以上は割引御相談致します。特に小学生団体は大割引……</p>	<p>▲御壽しの部</p> <p>東京にぎり 一人前 三十五銭 浪花壽し 全 三十五銭 折箱 全 三十五銭 折詰 全 三十五銭</p> <p>▲洋酒の部</p> <p>ウイスキー 十五銭 ペパーミント 十五銭 マンダリン 十五銭 キエラスキン 十五銭 クラウン 十五銭 ブドウ酒 十五銭 クリーム 十五銭 ベルモット 十五銭</p>	<p>▲牛乳全五銭</p> <p>▲洋食の部</p> <p>チキンライス 三十五銭 ライスカレー 三十五銭 オムレツ 三十五銭 ふなフライ 三十五銭 バナナ 三十五銭</p>	<p>▲御土産品</p> <p>大沼名所せんべい 小大二十銭 全紅葉せんべい 箱入三十銭 きびだんご 十銭 鮎雀 二十銭 大沼繪はがき 十五銭</p>
--	--	---	---

**大沼革正、時代の先鋒を切る
淡路屋食堂のサービス!!**

屋外設備 プラシコ、機械体操、其ノ他遊戯運動具、(御使用無料)
屋内設備 階上大廣間(無料休憩所)ビンボン、碁將棋其他設備
温泉設備 新しいそして気持ちの好い綺麗な温泉が出来ました
場所 大沼公園より電車で二〇分留の澤登山口大沼温泉
入浴料無料 自午前八時 至午後八時
家族室(小座敷)十数室有り

御室御使用料 (御一人) 三時間以内 金十銭
三時間以内 金十五銭
六時間以内 金三十銭
六時間以内 金五十銭

茶菓子附 同
同 同
同 同

軍人、學生、團體諸君は特に座敷料は無料に致します

大沼電鉄指定待合 淡路屋 大沼食堂 電話十九番
大沼電鉄指定待合 淡路屋 留の澤支店 電話十九番

大沼電鉄會社電車時刻表 (昭和六年四月改定)

行	大沼	留の澤	大沼公園
上	前午五、五、五	前午八、八、八	前午七、七、七
下	前午六、六、六	前午九、九、九	前午八、八、八

大沼驛發車時刻表 (昭和五年四月改定)

行	大沼	留の澤	大沼公園
上	前午五、五、五	前午八、八、八	前午七、七、七
下	前午六、六、六	前午九、九、九	前午八、八、八

「献立表 大沼電鉄株式会社指定待合淡路屋食堂」

昭和5年4月頃のもので、大沼電鉄大沼公園駅前にあった食堂である。
現在の駅前通りに面していた。

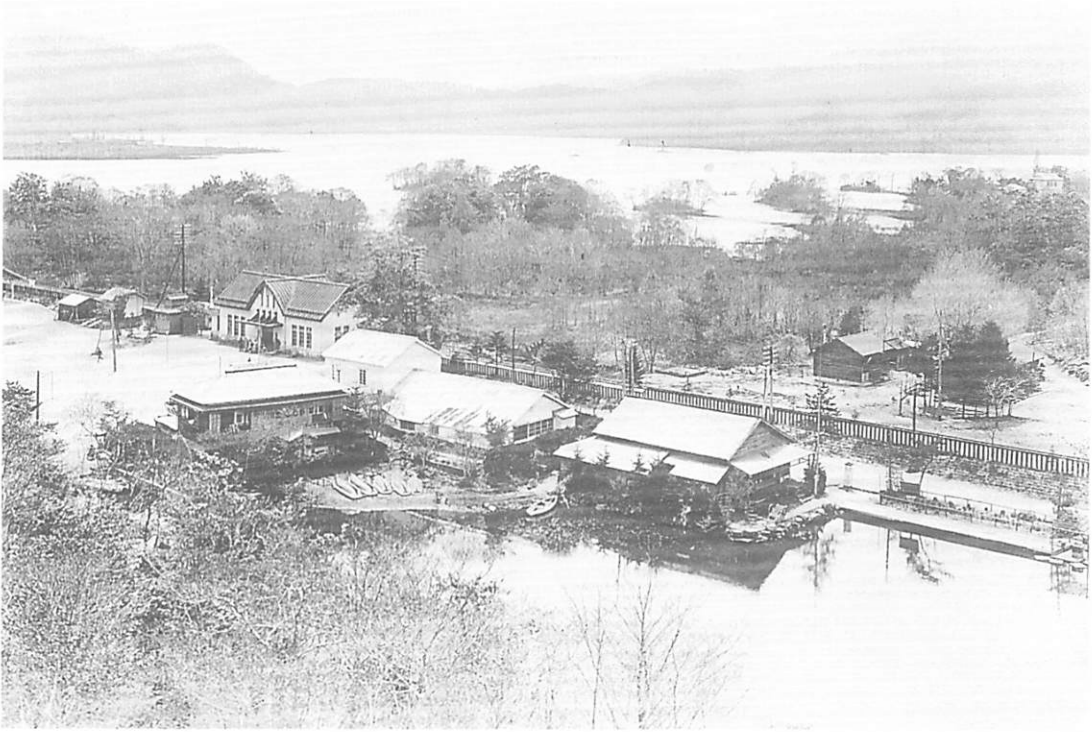
〈市立函館図書館蔵〉



昭和4年の大沼市街

大沼駅（現大沼公園駅）から周遊道路へ延びる駅前通りの様子で、大沼電鉄指定待合談路屋食堂が写真右下に見えている。バックの山は吉野山で、家々の間に見える道路には軌道が敷かれているのがわずかに見えている。

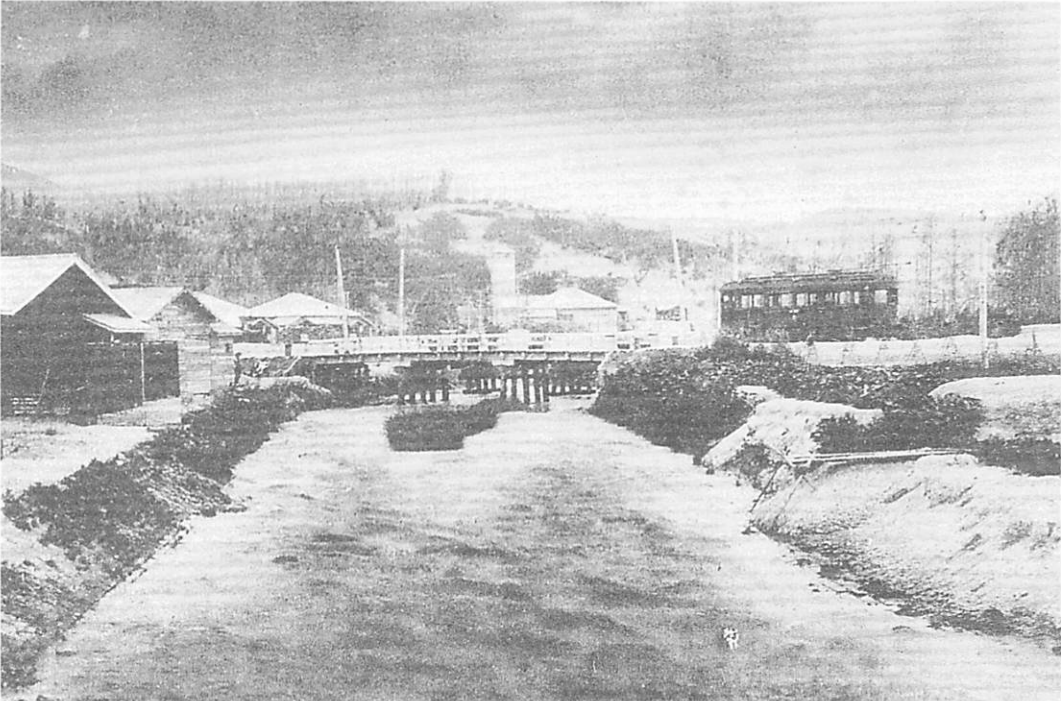
〈七飯町歴史館蔵〉



昭和初期の大沼駅前

大沼駅（現大沼公園駅）前の様子。おそらく展望塔から写したものと思われる。

〈七飯町歴史館蔵〉



鹿部温泉第三発電所ノ全景

大沼電鉄の車両が写っている数少ない絵はがきのひとつである。

電車がトロリーポール集電の単車であったことがわかる。

「鹿部温泉名勝絵はがき」より

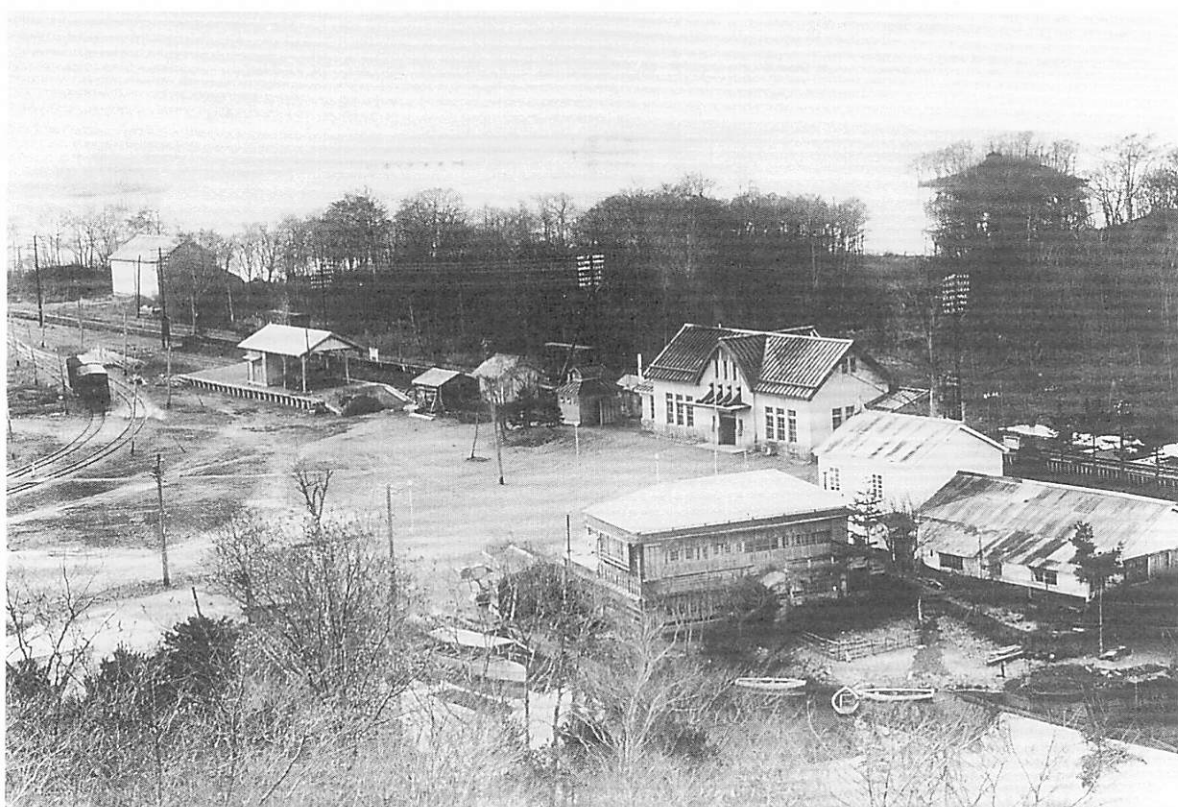
〈市立函館図書館蔵〉



大沼駅記念スタンプ
昭和12年7月5日
〈市立函館博物館蔵〉



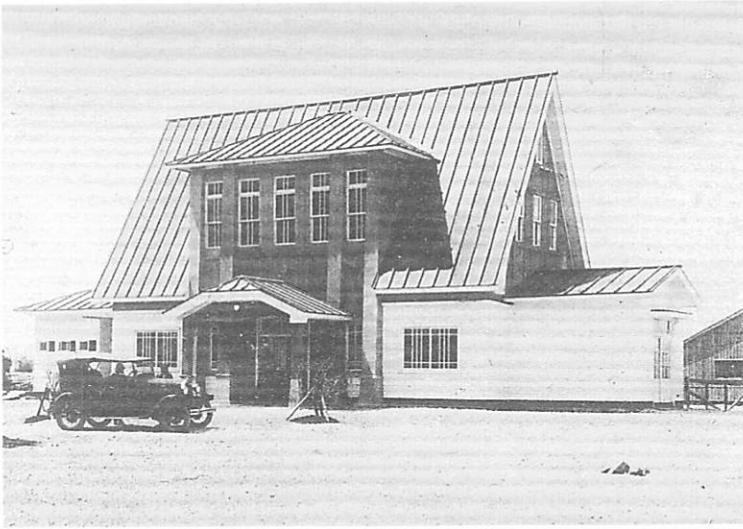
大沼電鉄大沼公園駅記念スタンプ
昭和12年7月6日
〈市立函館博物館蔵〉



昭和6年大沼駅と大沼電鉄

大沼駅舎（現大沼公園駅）とその左手に大沼電鉄線が見えている。

〈七飯町歴史館蔵〉



鹿部停車場庁舎

「鹿部温泉名勝絵はがき」より

〈市立函館図書館蔵〉



鹿部温泉市街

「鹿部温泉名勝絵はがき」より

〈市立函館図書館蔵〉



鹿部温泉鹿の湯旅館

「鹿部温泉名勝絵はがき」より

〈市立函館図書館蔵〉

市立函館博物館 研究紀要 第9号

1999年3月31日 発行

編集・発行 市立函館博物館

〒040-0044 函館市青柳町17-1 (函館公園内)

TEL 0138-23-5480 FAX 0138-23-0831

印刷 有限会社 久保内印刷所

〒040-0065 函館市豊川町7-26

TEL 0138-22-2678 FAX 0138-22-6742

BULLETIN
OF
HAKODATE CITY MUSEUM

No. 9

CONTENTS

Preface

TATSUO INOKO : Butterflies of the Oshima Peninsula
—From “The Matsumoto Collection” —

WATARU OZAKI : Achievements of Ohnuma Electric Railroad Company
—Part1 : Sightseeing area of Ohnuma prior to the
Railroad—

1999

Publisher : Hakodate City Museum

17-1, Aoyagi-cho, Hakodate, Hokkaido, Japan 040-0044

Phone 0138-23-5480 Fax. 0138-23-0831